

增補
 植物學
 附錄
 附錄
 四





增補 俳諧歲時記草

漢書律曆志太陰者北方北伏也陽氣

冬

伏於下於時為冬冬終也物終藏乃可

稱ス顓頊せんぎょく帝てい○魏相けい曰北方之神しん玄冥げんめい神

月令げつれい冬月其帝顓頊其神玄冥げんめい顓頊黑精

之君玄冥水官之臣少皞せうご氏之子曰脩しゆ曰熙し相代為あひかへ應鍾おうえん律りつ月令廣義鍾者動也言ことば水官すい官物應陽而動下藏也

立冬りつとう同上どうじやう孝經緯云霜降後十五日斗指

藏かく也なり小雪せうせつ同上どうじやう立冬後十五日斗指し亥がい為小

也なり則為雪時言者寒さむ孟冬まうとう廣韻くわういん孟勉まうめん也始也

未深而雪未大也なほふかしくゆきなからず孟冬まうとう冬始故曰孟冬まうとう

析木ききふ通俗志作ききふ析木誤矣あやまち當作ききふ析木ききふ禮記れいき鄭玄注ていげんしゆ孟冬者日月會於析木之律りつ



この説異端小近し、出入雲ふまゝの事ありと、
 一天下のうち何ぞ神ありといふ月ありと、荷田東麻
 呂翁の説ふ神無月ハ雷無月ハ十月ハ純陰の月あり
 ハ雷の声收つてつる故あり、六月ハ雷鳴月とい
 ふ對ありと、これ古人未發の論あり、雷と神との
 ことハ萬葉小神の如聞つる瀧とありと、後撰集ハ
 ちもあふる神のわらぬ我中の雲ぬるうふちありと
 ゆくの歌と詠ると雷神と又伊勢物語ハ神さへいみ
 ち入又云神あるさうさふ云此外證歌多し○昔
 藍云世謬問答ハ此月と神無月と申ハ伊弉册尊
 崩しハ月ありハ神云云貝原篤信翁ハ此月ハ卦ハ
 おして坤と純陰事と用いて一陽未復陽無の月ハ
 神ハ陽の靈陽ふきこまこと神と云云云云ありといへ
 とも荷田大人の説至當といふべし、此月諸神出雲國
 ハ集りてあふ故ハ神無月といふ説ハ甚じき妄説と
 といふも、能諧ハ趣のさうさふさうして句作をさし
 五元集 高砂也祢宜の
 湯治の神無月其角

十月 黄鍾

律月令仲冬月律中黄鍾高誘
 注云鍾衆也陽氣聚于黄泉

大雪

節月令廣義孝經緯云小雪後十
 五日斗指壬為大雪十一月節

仲冬

月令仲冬
 之月云 周正 月令 廣義

復月

五月一陰生
 至十一月一

暢月

禮記注暢克也言
 所以不可發泄者

雪見月

藏王
 小雪見月けこと冬の

辜月

淮南子仲冬之
 月命曰辜月 天正月

神樂月

藏王
 の言居の神樂月

冬

たのこき葉の音のさやき定家○露水云陽文
わらわさる神の岩戸より出ろふ比して神樂と奏を
る月とつらゆりて此月五節の舞をこもあり又東
三条の御神樂ホと行つてゆまふ名づけこもあり
霜相降月 霜より月の空より雪けこもえて曇り
霜降月 霜より月の空より雪けこもえて曇り

十二月大呂

律高秀注呂侶也萬物萌動于
下未能達見所以配黃鍾助

陽宣小寒

節月令廣義孝經緯云冬至
後十五日斗指癸為小寒大

寒

中同上小寒後十五
日斗指丑為大寒季冬
之月云云

臘月

說文冬至後三戌為臘祭百神也漢以
戌日為臘魏以辰日晉以丑日禮傳臘

者獵也因獵取獸以祭先祖蔡邕獨斷
臘者歲終大祭也故小臘月とつら
涂月

月令斗建丑之

殷正 夏以十三月為正殷以
十二月為正周以十一

月為正故有

周年 文選舞鶴賦窮陰殺節急
景凋年云周年、年の凋落

急景

月令廣義窮冬
日景短急云云 窮月 禮記季冬

千次月窮干紀星廻干天數將幾終注云日月
星辰運行至此皆速故處也次舍也紀猶會

霜蟾

蟾八月中小蟾蜍ありとつらより月の事と蟾
とつら霜蟾とつら霜夜の月の事と霜降

あれ秋冬の月皆霜蟾とつらへ陳真義が秋夜詠
月詩ふ映霜蟾とつらえあれを冬の月中も限らじ

殊更十二月の異名の中不雜て増山の
弟月 此月 井不出せり翰墨大全の意不審也

年中月の終あり故ふ俗ふこ子月とつら
春待月 和の諺ふ末の子とこ子と称すれ

藏王 くれてゆりて身ふそつら老ふと
とま待月のつらきつら長明 梅初月

冬

花ハまことつちむえごとほのこまそ
梅もつ月のころろりゆめく頭照
三冬月 蔵玉

あつちのころろりゆめく冬月
いそふつちの雪のはつき定家

十月 亥の子 けの部玄猪の 射場 いむ
条下ふ注を

始 はじめ 公事根源 先此月の三日ふ左右衛門弓場の棚と
はくふその日ハ天子ゆむ殿ふ出させまひて弓と

御覽まら也公卿以下束帯あてこれといふ天子御射
席をちつせて弓矢と御座の左右のこまふあてらふ是

と群臣といひまゝと射あてらふ誠ふ文武二ツ
の道ハ一とくくべらざる故ふ武をあらせせあざり

○江次第ふ十月五日射場始注藏人
式七日ハ五日ハ残菊の宴ふよりて
兼三冬物

凍 いこ 字彙孟冬 いこ 江湖の産魚ハ大きふ
始て凍る **鮒** ふ ろりの漸一寸五分寸ふ満るもの

多し頭口大きく尾細しこれを煮食ふ腥く佳品ふ
らど冬月和尔堅田江の渙入多くこれと取賤民賞

して饌と イ 猿蓑集 時雨きや イ 勇魚取 イ 方葉伊沙那
並ふり イ 船 十律師 イ 今いふく

ちらまひのつりへら イ 十月 卒川祭 イ 上酉日夏の
あて射と イ 三枝祭の イ 忌日御飯 イ 朔日 公事根源六
条 イ 月ふおねい

十月 忌日御飯 イ 朔日 公事根源六
月ふおねい

鰯 の頭 イ せの部節分 イ いぬる年 イ 詩經 未歳
の条ふ注を イ 亦莫 イ

十月 爐開 イ 炉を置寒を禦くこれを炉
開きといふ又茶人も炉開き会

進 爐炭 イ 事文類聚 十月の朔有司
炭爐炭と進民間置酒して

炭が会とあま イ 呂原明歳時雜記 京人十月朔酒と沃
て乃膏肉と炒中ふ炙る團居して飲啗ふこれを炭炉

会と イ 兼三冬物 爐 イ 和漢三才圖會 地爐和
名炭櫃の畧茶湯ふ

これを用人尺爐と イ 十二月 臘日 イ 風俗通 禮傳
称方一尺四寸 イ 云夏ふ嘉平と

冬 イ いろは

いし、殿小清祀といふ周小大増といひ漢改て臘といふ臘ハ
獵あり獸を獵し取て先祖を祭るなり説文冬至の後
三戌臘し百神を祭る徐錯曰臘ハ合之諸神を合せ祭るなり臘八粥粥の条ハ在る

臘梅わらも時珍曰臘梅一名黃梅花此者や梅の類ハ
蜜蠟小似たり故ふ此名を得大和本草臘梅近年中華
よりやまふ臘月小黃花を開く蘭の香小似たり葉ハ
梅の葉小似て小みて長し木の高さ二三尺四五尺了
過む大坂あて唐梅といふ梅の類ふあらむ○臘月小咲
の義ハあむも其花黃蠟色ろうろうの部藥喰
小似たり故り臘梅と名づく鹿賣の条より出づ

は十月拜墳そいふん一日夢華錄十月の朔都城
の士庶皆城と出て墳を
朝も寒食の節の如し郷食禁中車馬陵しんちゆう小
芭蕉菴挑青翁の忌日あり泊船堂杖錢子具佛坊
風羅坊ホの号あり又無名庵幻住菴蓑出庵瓢竹菴

ホの庵号あり十論為辨抄著支考故翁の雅名ハ金作
といふより伊賀小四姓ありて桃池黨の中の松尾氏
ありととむり俳諧の名ハ宗房といひ落髪の後ハ桃
姓のいふことあり桃青ともいふるハ梅子熟せ居る意
ありとやむハ小家名をとげざるのひあり十九の
年ハ官ととむるときて洛陽小季吟を師といひ武蔵ハ其
角嵐雪と門人とせり深川の芭蕉菴ハ隱遁ありて
三十六のときありととむ風俗文選許六作者列傳ハ芭蕉
翁ハ伊賀の人ハ武名ハ松尾甚七郎嘗て世ハ功と遺え
とて武の小石川の水道を修して四年ハ成る速ハ功と
捨て深川芭蕉菴小入る年三十七支考ハ三
十六の年芭蕉公羽
正傳藤堂家藩竹二坊芭蕉翁挑青ハ伊賀國阿拜郡
根植村の人ありて俗称松尾半七後ハ改て松尾忠若門
宗房と号正保元甲申の年の生れりて弥平兵衛宗清
苗裔ありて宗房と名づく父の名ハ儀左衛門母
ハ豫州宇和島の産ハ桃地氏の娘あり支考ハ翁の碑
名ハ其先ハ桃地の黨といふ今ハ松尾ありりて書
ハ母の氏と聞あやまりしものハ弥平兵衛宗清ハ屋

冬は

教跡今も存り、庭も大なる石の手水鉢あり、人々まこと
 まこと名物とも、其類今同郷の姓とて、拓植氏松尾氏
 福地氏亦是あり、儀礼工門、嫡子與左工門、野赤坂町ふ
 手跡師範とて、家業とも、次男半左工門、藤堂主殿
 長基の臣とて、三男忠右工門、芭蕉の寛文壬寅年藤
 堂新七郎良精の臣とも、夫より嫡子主計良忠、能名
 へ隨身を、伊賀上野桐両筆記、桐兩八翁の門人、蟬吟子
 八洛の季吟不俳諧と學子に申さる、故ふ翁もこり、其
 門ふ入て、いぬとて、世の中あり、西の年、と発句あ
 り、十四歳の時、明曆三年、あつふ蟬吟子、不幸に
 て、寛文六年の四月世と早うし、あ故ふ翁、君臣の
 因風雅の縁、いとうとあら、數のあま、遺骨を負く
 高野山ふ登り、報恩院ふ納り、六月帰國とて、その後、
 うに道世の志、あつて、二君ふ仕、いほと告て、あつり、
 暇と乞ひ申、いほとあつて、いほとあつて、其秋、
 らん同僚孫太夫といふ者の門、短冊を結けり、雲と
 ころ友も雁のいほとあつて、いほとあつて、残し國と去

歷代滑稽傳

詩六

芭蕉翁桃青、伊賀の産、江戸に居

て俳諧を鳴る、桃青二十奇仙といふ俳書と晉二十奇仙
 吟の内、鶯声波とうつて、腸永る夜、涙子とあつ、鯨の
 其声うら、一才二の弦、いほとあつて、牛房と刻
 む前後名を出し、櫻集、二十奇仙一部、談林の
 時俳書ふ長し、日々向上ふすりあけ、終ふ談林と見破り、
 はじめて正風体と見届、躬恒貫之の本情と探始て、道
 の辺の木槿、馬ふくをいほとあつて、天下舉て俳
 諧中、真の開祖、正風の翁と称し、侍る、天下の門人、數千
 人のうち、造ふ正風の体と得るもの少し、初懐紙の項
 杉風、嵐蘭、其角、嵐雪、曾良、亦江戸に在て、隨仕、其
 ころ故郷伊賀に立歸る、道の紀、草枕とも、野ざらし
 の紀行ともいふ、大津の千那、尚白、青垂、三人師とて、のむ
 辛奇の松、花より、龐、此とて、この事、名古屋にて
 野水、荷も、この杜、冬の日、の俳諧と撰し、次の春
 春の日、あつて、曠野に俳諧と勸む、風体冬の日、春の日
 八初懐紙ふち、曠野に俳諧とあつて、あつて、あつて
 大垣の如行、菊口ホの門人、招て師とし、頼む、野ざらしの
 紀行の時あり、其後、奥の細道の時、大垣より伊勢、迂宮

冬は

木節あらず知るものなり願くハ木節を急よぶて
見せむらん去来と一同小よびよせ談をききとも有
まむとやく消息とおろろとあり夫より兩人消
息をききぬ京大津へつづらしむ然るふ之道が
亭ハ狭くして外ハ間所も多し多人數入るる保
養介抱もありまゝとて其所此軒と立廻り我知
人ありて御堂前南久太郎町花屋仁左門といふ者
の裏座敷とかり受たり間所も敷ありて亭主ハ物
敷奇ハ奇麗諸事ハ勝手ありし其夜直ハ御介
抱申て花屋ふうつりもひり此時十月三日ハ四日車
畦止舎羅何中ハ師の不例とまらざり之道亭主ハ至
小病ともふ事と聞えりて花屋もあゝ病氣不損
つと尋問の人ともいふも小坐席を通るはと張紙
と出も且仁左門ハ断ると云三日廿七行昼夜ハ天
くらとる夜半過去来ききぬ二日朝の状三日の朝
其座より直ハおちち伏見ハ出しハ己の時ありし
舟ハ乗八軒屋ハ著しハ亥の時ありしと直ハ断
病床ハ参りしし師も嬉しく胸ハせまりしハ

わのと宜いざりしが諸國ハちまをじ人々ハ我と親の
如く思ひあふ我老れて優きともあれハ子の如
く思ふ事あり殊更汝ハ骨肉と受けし思ひあふ
三日見まじ十日のおひせりあつた此度ハ遠き
境にて難治の憂ハ罹り再會ありし思ひ居し
ふ逢見とての嬉しさをて袂とちりあつた去来と
もより落るるもぬくひて云僕世務ハいまもあつた
させる實意も尽さぬ御懇意の御意とかり
あつ事生と隔つとも忘却仕らぬ數行の涙あせ
何様賣菜の効驗心もあつとて去来又消息と
ためて飛脚便りハ木節ふつると支考手記云同三日
の夜子の時といつきて木節来る二日出の雨ハ消
息その夜著せりぬ大津と旦の時やう一番舟ハ乗
しりと短日故違著諸子ハそとくあして直ハ御
體とうい御脈と診て主方逆挽湯と調合と四日
朝木節申さるふより朝鮮ハ参半兩道修町伏見
屋より取同ト包香十五袋と天氣より之道
より世話めて洗濯老女と傭ハ師の御衣裳と外連

冬は

中の衣裳とまゝ、園女より御菓子水仙を贈らる。支考、惟然介抱、次郎兵衛とて手届く、之道取計らし、とて、舎羅吞舟と云々の未、按摩あんま、やうけ、ぬい、今日三十余度及ぶ、度毎、裏うら、急いそ、後重、**次郎兵衛手記**云、五日朝、天草乙州、正秀、来、天氣曇る、寒、冷甚し、時候の故、師時、悪寒の氣あり、次郎兵衛、天満、諸、登のぼ、き、帰かへ、る、今日、師食、ふ、こ、ひ、索もと、麵めん、二箸、夜中、這は、ふ、五十度、及ぶ、六日、天氣、陰、暗くら、き、ま、あ、る、朝の食、乳面ちゆめん、三箸、前後、よ、り、か、ら、寝、入、ら、る、む、お、ら、く、睡眠、し、給、は、目覚、より、去来、と、ち、う、く、召、して、先、の、頃、野、明、方、に、残、し、置、し、大井川、の、吟、行、せ、句、大堰川、波、ふ、塵、あ、り、夏、の、月、此、句、あ、ま、り、景、色、過、さ、さ、ど、夏、景、色、い、う、さ、う、と、思、ひ、居、ら、う、し、が、清、滝、ふ、て、清、滝、は、波、ふ、ち、り、こ、む、枯、松、葉、と、作、り、事、柄、の、変、り、た、れ、ど、同、案、さ、う、と、人、の、そ、ん、も、つ、ら、あ、れ、ど、大井川、の、句、の、捨、た、ら、ん、と、汝、不、申、し、ら、う、と、あ、ら、う、頃、日、園、女、は、招、け、て、お、ら、る、の、目、お、も、て、見、る、塵、も、ち、と、吟、じ、ら、う、是、ま、ご、同、案、ふ、似、て、句、の、道、ま、ち、同、し、夫、故、前、の、二、句、と、一、句、不、捨、て、白、菊、の、句、と、残、し、置、ん、と、思、ふ、

汝、意、い、う、ん、去来、涙、と、う、く、名、匠、の、か、く、名、と、惜、し、道、と、重、し、給、ふ、有、が、と、さ、さ、ら、う、づ、う、句、一、章、ふ、さ、ま、ま、と、千、辛、万、苦、し、ら、う、御、病、惱、の、う、ら、の、脚、骨、折、夙、雅、の、深、情、を、事、と、ま、ど、眼、あ、ら、う、の、何、者、う、此、句、を、同、案、と、さ、う、と、恐、ろ、う、づ、ら、此、句、を、同、案、同、意、を、さ、う、申、さ、も、の、無、眼、人、と、申、者、う、ら、その、故、ハ、此、句、々、景、情、ふ、備、り、て、句、意、と、見、る、時、ハ、三、句、と、よ、り、別、さ、う、我、ハ、句、の、意、と、目、お、見、て、句、の、姿、と、見、じ、と、青、苔、日、厚、自、魚、塵、是、隱、者、の、高、儀、と、あ、め、ら、う、語、園、女、い、ま、ご、わ、ら、う、し、て、陌、上、桑、の、調、あ、ら、う、と、い、め、ら、う、い、う、さ、さ、ら、う、と、妙、く、語、と、妙、さ、う、ら、世、人、此、句、と、さ、う、ら、め、れ、園、女、清、節、と、さ、ら、ら、ん、や、波、ふ、塵、あ、り、の、語、ハ、左、太、仲、が、必、非、絲、典、行、山、水、有、清、音、と、い、う、絶、唱、も、あ、ら、う、と、園、女、二、夫、ふ、ま、さ、さ、さ、る、貞、潔、と、大井川、清、滝、の、絶、景、と、二、句、の、問、相、さ、う、ら、つ、て、感、じ、て、も、餘、り、ら、う、と、申、せ、ら、う、師、も、機、嫌、と、い、ふ、し、け、ら、**去来手記**云、七、日、朝、う、り、不、相、應、の、暖、氣、さ、ら、雲、う、り、こ、し、雨、さ、ら、薬、方、逆、挽、湯、ふ、加、減、又、乳、麵、と、い、う、こ、も、あ、ら、う、園、女、う、り、見、舞、と、い、う、菓子、亦、贈、ら、る、鬼、貫、来、ら、う、去来、應、對、し、て、還、ら、う、園、女、何、中、滑、川、来、ら、う、去来、支、考、會、叙、

冬、は

を、終ふ薬とめさむ終日くゆる夜ふ入て暗る人音も
 静ありたりと燈ののりふ人々如し居り、此別正秀
 亦去来小申したるも今度師の泉下の客とせし居り
 給ひ、此後の夙雅いふ成行をらん去来黙して居り
 しが、我も其事心あかりし故、二日の消息をきしゆを
 斯いときまわりたり人々も左思ひ多ふやとあはれ今
 宵閑静に、今の体不ぞ御快復覚東は、
 滅後の俳諧とて奉らんとしておづふ枕上ふうかひよ
 つして、機嫌とてらひ問申したり、翁次郎兵衛ふた
 けはとまれ息つき多しと曰、俳諧の變化空しくし
 ても、真草行の三とて多しと、其三より千變万化
 也、我のまご其書とめり、海此以後とて地を
 てもあはれ地とて心杜子美が老と思ひさひ西
 上人の道とて、調業平が高儀とてうつし、いづまて
 も我をせふありとあはれ、他ふ化せらるるも
 せしひとてこれあれども息損口うふらと喘ぎ多し
 ると、吞舟脚口とて又薬とまわらせたまつ
 まりあふ、のく筆と執て是と書と、**惟然手記**云

八日天氣快晴御不食多り、京の損士来り信徳より消息
 とりて御病体と問、近江の角上より使来る人々勝手の
 間て、今度の御所勞平復と祈奉らんとて、任吉大明神
 小連中より人と立て、去来申しりまはり、
 べし、之道次郎兵衛闖はりて社務林米女方小祝詞
 ととの、厚く神納の品々贈らふ奉納、鴨のこ
 多り、諸きわひ文章、木づらしの空見あはれ、雀の声
 去来起、こゝろ声ゆるまうき湯波うね、支考、只うらふ
 竹のこや、しとて、**惟然**此外連中の大勢の集會ふ
 竹のこや、しとて、与あり暮之悦い、しとて、師をちり、木節去来小申
 々、今今朝御脉をうらひ見申とふ、次第氣力も、
 ろく、しとて、脉体、しとて、最初小食滞より、
 泄浮多し、根元脾腎の虚、大虚の痢疾、故不
 逆挽湯主方あり、尚又加減して心を尽す、しとて、薬
 力とて、願くハ治法と他醫ふら、しとて、思ふ去来師ふ
 申師の曰木節の申条、しとて、むい、しとて、仙方あり、
 虎口竜鱗と醫とて、天葉つ、しとて、吾うく悟道、しとて
 是ハ我呼吸のうら、しとて、間ハ、しとて、木節が神方と服

冬は

其瓜神の名章とて多う多うと諸門葉の悦び他門の聞
 え未代の龜鑑ありと涙もろく涙とあふくと眼あふきの
 身と見ハ魂を飛さん耳あふきのこまを聞ハ毛髪これ
 為やうごうん列座の面々感慨悲想して慟絶一（声なし）
 こは師翁一代の遺教経此日より殊更におとつへり
 度敷まゝとて去来手記云十日初時雨せり師夜の明こ
 より度敷まゝとて一入あふとつ折節ふ諸言ありと
 取りあふことなれし木節此日芍薬湯とむ諸子うち
 より食事とてあふせとせとてあふを梨実と
 のどしあふ木節とて制しとせとてあふり小望とあふ
 故止とてえむとせとてあふとてあふとてあふとてあふ
 くる所あり死期とてあふとてあふ申の下刻小至とて
 人心地付あふ今日ハ少も食しとてあふとてあふ
 十一日朝まゝとて時雨を思ひけあふ東武の其角承
 是ハ東武のとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふ
 めり泉州より浪華小打入とてあふとてあふとてあふと
 聞つけとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふ
 床ふ参て皮骨連立とてあふとてあふとてあふとてあふ
 且

愁ひ且悦ぶ師も見やうとてあふとてあふとてあふと
 其角とてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 来支考其外の衆次の間小招き却病体の始終と物語
 る此夜もあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 居たりとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 と望とてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 せらひてとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 みて快く召さるり朔日以来の食事と土鍋小残と
 たつとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 や冬こり去来去来云趣向と他ふとてあふとてあふと
 事を口とてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 らとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 一の蒲團と引たりとてあふとてあふとてあふとてあふと
 よもあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 ぞ其事とてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 わらひぬ惟然とてあふとてあふとてあふとてあふと
 一座是と聞てとてあふとてあふとてあふとてあふと
 とあふとてあふとてあふとてあふとてあふとてあふと
 冬は

冬は

時珍曰胡蘿蔔元の時始て胡地より
来る気味蘿蔔に似たり故に名づく、
十月新

嘗祭 中、外 **公事根源** 今年の初稻と神奉ら
せりふり、御代の始りあり大嘗会や、

の八年毎のまゝに新嘗会といふト食の人々
摺衣日陰と著き、用明天皇一年四月より始む、
庭燎 の

部神楽の **錦の帽子** 部の鷹の葉
余に注ぎ、 **新玉津**

島火焼 十三日俊成卿御請之五条の南、烏丸の西玉
津島町あり **紀事** 昨今冷泉家

多く恭詣と或ハ法衆の和音あり九この門前一町こ
とをく此社の氏子あり今日市人神前の御酒と

冷泉家不献る時 **雞乳** の部鶴始、葉と
ハ酒食と賜をふ、 **ほ**

十月法勝寺大乘會 廿日より○當寺ハ
廿八日まで 白河法皇

の皇居あり、その後天台宗の住持聖道衣あり後
醍醐帝の勅ふりて律衣とある、今寺絶て岡崎

村の數中、諸堂の跡残る、九重の塔の跡、村の南あり
了塔檀と号き、糸櫻の名所あり、風雅集淨妙寺関白

とありて過ぬるをめで糸さうら心ありる春の木の糸
一説に當寺ハ南禅寺の西北、新黒谷の南あり、古の地

ハ白川の大正忠仁公の別業ありて、寺ハ白川院の御願
あり、當寺の九重の塔、浪速の浦あり、つりしとあり

蕪三冬物 搦と掘出し、るものあり、關東まで
根骨といふ山家玄冬のころ、ゆふ昼夜をまこと焼く

寒と凌ぐものあり、糸切菌、不滑ハ昼夜がくものふあ
らむ、灰とわらひ埋火とく、やまつ、干菜とあり、

夜明る迄、寒と防ぐ用と、 **干菜鉤** 干菜とあり、
採て簷下ありけ、陰ふ 蕪菁の葉、

乾き、喚て懸菜と号、 **十月報因講** 御仙事
御講

廿二日より廿八日まで○親鸞上人の已心日あり、上人ハ
内丸の後亂、藤原の有範の男、伯父範綱養ひ、子

と号、字ハ善信坊、名ハ尊空又範宣と更り、初め蕪鎮
と師と号、後源空の才子とあり、弘長二年十月廿八日

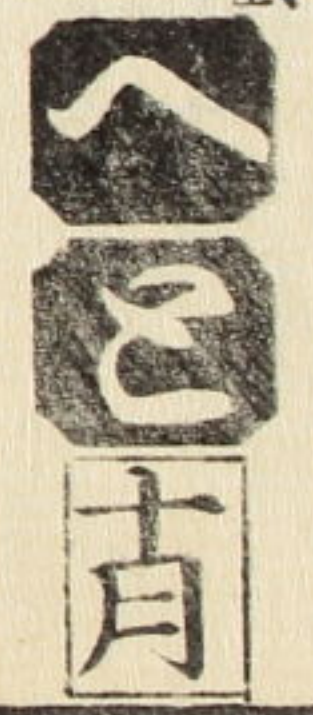
冬 ぼへと

寂也年九十一浄土真宗の開祖より、東西本願寺十月廿二日より廿八日まで報恩講と修を、京江戸在家宗門の徒叅諸群集を、或ハ御霜月と称を、又御講よりハ、今時として天氣快晴あり、俗ふるをと御講田といふ、

十二月星佛賣

十一日 紀事 此月十二日大佛師 未年の属星の形を彫く

祭裡不献む、民間も亦この事とふを故、人家各星佛と買て帰依の僧と請きて、ここと祭る、故、市中星と賣者あり、所謂日曜、月曜、木曜、水曜、火曜、羅喉、計都の像あり、



冬瓜 時珍曰冬瓜其冬熟を以てふ、貞享或ハつらつらと訓ふ、中古ハ総て秋季とふせり、

西瓜と秋とふせり、加減より、東福寺開山忌 聖冬瓜と冬と定むべきあり、

兼三冬物鳥叫、鳥立を暮 忌く、この部不注と

たの部鷹 海鼠 鼠の条注ス、十一月冬至

朔且冬至 月令廣義 大雪の後十五日、斗子不指と

一陽の嘉節 冬至より十一月の中、陰極て陽始て至る、

日南不至、漸く長く至る、玉燭宝典 十二月子不建

す、周の正月、冬至日南不極、景極て長し、陰陽日月

万物の始、律黄鐘不當、其管最も長し、故、履長の

賀あり、朔且冬至、李吟云十一月朔日冬至、ふあるとい

あり、世年一度、まゝのまゝてめて、瑞祥あり、まゝて

其日ハ天子南殿に出御ありて、旬と行をせと多し、公卿

御覽

この部五節

豊明節會

小巳心衣日蔭曼 日蔭糸心菓

江次第 新嘗會裏書云、毎年十一月中の辰の日、行之

豊の明の節會是、天子新穀と嘗む、故、新嘗會

冬、と

この日一村の童あつまり、往来の人小銭を乞ひて祭礼の料を、銭とあつまるを、戯れ小繩と以て往来を遮り留む、あつてこの日とあつるもの、商買とあつても今日此處と通らざ、但坡の魚荷飛脚、故ありて道路をづらひたり、**酉の市** 酉の日 伊豆國賀茂郡、**鶏の** 三島の駅あり、

町詰 酉の日 鶏大明神の社、武州葛飾郡花又村、江村より 毎年十月酉の日市と

つ酉の日三つあつれば三日とあふ市より上の酉の日と専らとて江戸近在より諸人群集して甚ど賑り、是當社神事の遺意、土産小芋くらと賣、参詣の人必これと買ひて家小帰る、又此日浅草寺の裏手鶏大明神も此市、**冬至梅** 和漢三才圖會 單葉の冬至梅中花ありて紅、冬月

ひらく八重あつて、**十二月立土牛童子像** 花浅紅の者あり、

公事根源 大寒の日夜半小陰陽師土牛童子の像と門口より昔黄赤白黒の土牛と、門々小春夏秋

冬の色小随ひてあつる慶雲二年天下疫癘さうりあつて百姓みりく失うしうむ、土牛と作て追儼とつてあつて、まき異國の書あり農事のあつる時と示さんとして土牛を立ちり、**近喜式** 土偶人

十二枚 高サ各とあつる、**豆腐蒟蒻と氷** 製法本

土牛十二頭、**年忘** 歳の暮、親戚朋友と會り宴と設く

意、**年木推** 春用つる所の薪と年内、**月合** 季々之月が

命四監叔秩薪柴、又云孟春之月禁止伐木、注、以盛徳在木也、云然、まハ春ハ木と伐らぬ、

年の内小春の薪と伐ること、**天木** 高島の杉山川の筏士ハ、

年の市 来春用する物と悉く賣るあり、**五元集** 年の市、

年の終の魂祭 秋のこの部魂、**年内立春** 祭の条、

冬

古今年のうち春八来ふり一とせを去生とやいん

こやうとやいん〇貞徳曰年内立春和哥の題春の

部を代々の撰集あはくハ巻頭入ハ

らふ連哥ハ冬冬俳諧又冬ふ用じ

ふ夜もあり年

の暮芭蕉

の暮

まさらつ

在原元方

水まらつるも

あり道助親王

領子内親王

年の湊

年の際

の名残

年の冬

年の果

年み川

如

年籠

諸て年ととも是と年籠と称も諸

國あるとて其因郡の神社佛閣

京都とてハ伊勢熊野と近くハ祇園清水愛宕

年浪あがら

歳の末

歳

年の湊

年の際

年の冬

年の果

年み川

年籠

諸て年ととも是と年籠と称も諸

國あるとて其因郡の神社佛閣

京都とてハ伊勢熊野と近くハ祇園清水愛宕

猿蓑これ

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

伊勢熊野去来

十月

茶の花 陸羽茶経 其樹瓜盧の如く葉ハ苞子の

如く花ハ白薔薇の如く実ハ栴桐の如

至て苦く渋し栴桐ハ蒲葵の属ハ云

カ草 たの部鷹狩

千鳥 村千鳥 浦千鳥 磯

鳥島千鳥濱 和漢三才圖會 鶴

千鳥 小夜千鳥 集乳鳥とも又智鳥 江海邊

在て百千群とふそよて千鳥と称も鷗類し鶴

み似て大其頭蒼黒頬白く眼の後小黒き條あり

背蒼黒く翅黒く腹白し胸黒く嘴もまご蒼黒

尾短く脛黄蒼りて細く長し冬月最も多

水上ふ飛鳴き侶とよふ九鶴の種類

甚どおぬし四十八品ありとつ

本草 雀より大之前三指後指あり歩む足と左右

りちちてゆるゆる人の歩むとこれふ似ると千鳥足

冬 ちりぬる

と 十月 智恵粥 九の部大師 講の条不出 十月 著

云 欽政 公事根源 五月ふ同じし是檢非違使在京 延喜式 凡罪人者隨罪

輕重者欽若盤加 〇頸ふ在と 鉗こひ足ふ在と欽と云刑具あり 十月立

冬之節 素問注 立冬節 初五日水初て水次の 五日地始て氷ふ後五日雉大水ふ入て蜃

とま ぬ 兼三交物 偷立鳥ぬきつる鳥

たの部鷹狩 はの部集の 条不出 暖鳥 条う注ま 十月

御影供 御命講 法大師忌と御影供とらふ

み紛る故おちのうとらふとめと通と影讀く

めんとするのこ日蓮上人傳元亨教書不載と日蓮

上人ハ房州の人三國氏弘安五年十月十二日寂在年六

十一後醍醐天皇勅して大菩薩の号と贈らる蓋洛

北妙頭寺の妙実雨と祈るの賞ふ因てありと云武

州千束郷池上村長栄山本門寺と終焉の地と昨今

宗門の徒佛壇を掃除し紙あて製しうる造り化と

うふ酒五 御取越 一向宗門の徒此月親寫上人の

御取越と 神集 土見り 和漢三才面会

大社神事 神在 十七日 大社杵築大明

神の宮ハ出雲國杵築村あり大己貴尊孝子安天

皇三十二年垂跡昔ハ宝殿高と三十丈今減して八

丈後深草院室治元年八月廿五日建立三条院應

保元年始て三月会行らる〇毎年神祭七十二度中

十月ハ殊ハ深秘の祭といふ十月十一日より十七日迄

と齋と称とこの間風烈しく波のり日一蛇化度

藻ふ乗として海濱ふ浮む人らととれむと云國造

へ訴ふその人ふ褒美ありこの龍蛇と曲物ふ盛つとく

神殿ふ納とらふその蛇の形瓊蛇ふ似て錢形の斑文

連ふ又五色の彩色更らるが如し尾先ハ魚尾ふ似て

冬 と

この後舞曲も、まゝ、金春金剛の兩座太夫供奉の時、社の立合と舞入、觀世保生兩座の太夫供奉の時、弓矢の立合ととと舞入、大小の鼓と以て、と拍と殿後、大和國と領と、の武家、各鞍置馬、長柄の鎗を出し、奉供の行列あり、夜ふ入て、旅所より、還幸、粗神幸の義、同し、○日の使と、關白殿下より、奉らる、騎馬、伶人、是より、黒袍冠の中子、小藤の造、花と、この祭、八人、皇七十五代、崇徳院御宇、天下、大、饑饉、三年、又、大、疫癘、あり、關白法性寺忠通公、この祭、礼の大願と、祭し、ば、あて、天下、静ま、ふより、て、毎年、行、と、と、保延二年、丙辰、九月、二十七日、これ、この祭、の、と、ま、り、
 ○掛鳥、と、い、ふ、春日祭のとき、鳥獸と以て、執、と、と、こ、と、と、掛鳥、と、い、ふ、雉、千二百五十六羽、兔、百三十四耳、狸、百四十二匹、是、又、保延二年、より、も、ま、ま、あ、る、春日、小、先規、より、地侍、と、六、派、あり、平田、長川、長谷川、葛上、乾服、整、奈良、の大宿所、あり、ま、り、掛鳥、の、事、と、主、と、ま、り、○後、日の能、と、い、ふ、春日祭の、翌、廿八日、小、能、藝、と、施、と、と、と、ま、り、ま、り、前日、旅所、の前、より、い、て、流、鑄、馬、伶人、の、舞、相、撲、細

男舞田樂ありて又翌廿八日

猿樂あり、故、後、日の能、と、い、ふ

十二月 弟記の朔日

乙兒の餅

一年中の朔日の終、あり、俗、小、乙子、の、朔日、と、い、ふ、和の諺、小、季、の子、と、し、子、と、稱

も、又、初の子と太郎子と稱も、故、歳、の、初、の、月、と、太郎

月、と、い、ふ、歳、の、末、の、月、と、乙子、の、月、と、い、ふ、故、小、乙子、の、朔

日、と、い、ふ、又、此、日、餅、と、と、い、ふ、と、い、ふ、と、子、の、餅、と、い、ふ、江戸の

俗、と、い、ふ、と、川、浸、餅、と、い、ふ、俗、傳、と、い、ふ、と、食、へ、水、難、と、い、ふ

大神祭

上卯、此、祭、一、年、一、度、あり、夏、の、と、の、部、に、注、せ、

御佛名

被綿

十九日

続日本後紀

仁明天皇五年始

柏梨の勸盃、廿一日迄、て、宮中、小、仏名、と、置、く、公事根源

仁寿殿の御本尊と、う、つ、して、御帳の中、ふ、け、て、南の

額の間、又、南北、小、机、と、と、い、ふ、仏像、塔形、と、い、ふ、佛前、小

香華と備、小、相、地、獄、変、相、の、御屏、几、と、い、ふ、○被綿、ハ

御仏名の時、導師、並、小、衆、僧、小、被、け、賜、り、綿、と、い、ふ、

江次第、ふ、と、い、ふ、○柏梨の勸盃、江次第、裏書、云

柏梨の勸盃、ハ、む、り、府の中將、和氣の某、授、津、國、柏

冬、を

初め臺と起し黄花とひらく、四出芥のごとく、角と結ぶと亦芥の如し其子均して圓し芥子小似て紫赤色云 **雄の花** 牡の花さき此の部の **枯蘆** 芦既小成

長くして四五尺より丈をくり小至て其葉老衰して纖く、莖筠白色と帯びて竹う似たりとを枯草といふ、**枯柳** 葉尽く黄落せし **枯野** 千草の枯まると野とり露と結び

冬 **かしこ鳥** 條目 雁鳥の異名、百山と越ても帰るくこ鳥雲のそよりこ

羽を高 **狩** 鳥獸小限らるて尋求ると狩云くとも、但し爰よ出せるハ専ら雁鳥狩と云る

狩場 古事記 **狩場の雉** 注小 **狩杖** 田犬不及

もの杖との犬といまひる杖、雁鳥三百抄 **狩杖** の櫻の木を用ふるあり杖の長さハ其人の長さ小切もの

鴨雁鳥 鴨 鴨を取 鳥 格物論 鳥ハ野鴨 雁 雁鳥狩とのやとど、江海沙上小在て

沙石と食ふハ蛤を食ひて消化まを糞小随て出つ凡鳥ハ雁より後小来り春ハ雁より後小帰る○あぢむ

ら夫木とをさむる水といふとらふあぢむとらふる諏訪の入海 西行 鸚鵡のむらさきとらふあり○

鈴鴨 句合 鈴鴨の声うらここ月寒し嵐雪○あぢむか、刀鴨と云一種、又尾長鴨ともい味美、虚と補

ふ○あいき小鳥ふ似て同じくもど、嘴とがる丸まもあり魚と食を味とらむ○いとう長アイサ真鳥より

大之首黒し○みとあさむらひあり、鶯鳥、緑頭、赤頭、うら、鳥、真鳥、此外種類多し枚舉

不違あぢむ○水翁、鴨のものと増山井小出せり急就

章鳥翁顔と濯ふ水藻と得く喜悦ふ注鳥鳥羽ハ頸の上の毛云故ふ **鳩** 鳥の俗称、小

水翁といふ尋ぬべし **石花** 蘇頌曰今海旁皆こきあり尤多し石に附て生く

礫相連、房の如し呼て蛎房とを晋安の人呼く

礫角とす、初生止石の如し四面漸く長し、二丈乃至る者、懸巖として山の如し、俗礫山とよみ、一房の内

冬 加

こと更ふいふべうらむ九位優家十一月朔日と以て杜夫魚相祝と云元日のことよりて芝居の正月と云

山海名産圖会越前の霰魚ハ此国の外ふちの杜

父魚ふお充るハ誤と云霰のふる時ハ腹と上りて流

るこい一名と云つらのハ声あり是杜父魚の種

類あり杜父といて誤也あらるハ統核葦か

ふハ腹とあり寒苦鳥五雜俎五臺山ハ虫ハ

へてハ霰拙候寒苦鳥五雜俎五臺山ハ虫ハ

て四足肉の翅あり夏月毛羽五色其鳴ハ鳳凰我

ちハ冬ハ至毛落て鳥の雛ハ冬ハ至毛落て鳥の雛ハ

寒ハ忍て號く得過且過ハ其糞鐵ハ如くハ狀ハ疑

脂ハ恒ハ一處ハ集ハ醫家ハことハ五靈脂ハハ

是ハ佛經ハ印度大雪山ハ鳥あり此鳥夜寒と苦ハ

鳴声寒苦身と責む夜明けハ巢ハと作ハん明ハてハ

今日死ハことハ亦明日と云ハ何ハ故ハ小巢

と造ハて無常身と安穩ハせハ玉葉ハあハれハ

雪の深山ハ鳥ハのハあハるハ

わハらハくハ人ハのハあハきハるハ後景極

十二月被綿栢

梨勸盃

この部御仏ハ名ハの条注スハ鶺鴒ハ始巢ハ礼月令ハ

此記ハ丑月之候ハ五月十二月也ハ雞乳同上ハ大寒

之候ハ十二月中也ハ一説云ハ十二月始ハりハ巢ハ

ふハ戸開ハふ太歳ハ背ハきハ太ハ乙ハ小向ハふ未歳ハ凡ハ多ハきハ

ちハりハ巢ハありハ鳥ハ下ハまハ故ハ曰ハ鶺鴒ハ未ハと知ハりハ狸ハ

往ハと知ハるハ鶺鴒ハの形状ハ乾ハ鮓ハ製ハしハるハ鮓ハ

秋の部鶺鴒の橋の条注スハ乾ハ鮓ハ製ハしハるハ鮓ハ

も寒ハのハ加ハ小ハ拂ハ滑ハ粒ハ言ハ雜ハ談ハ法ハとハのハ年ハのハ終ハみ

内ハ芭蕉ハ僧ハ尼ハ山ハ伏ハのハ輩ハハハ金ハ銀ハ米ハ錢ハ等ハ

と供養ハしハ施行ハしハるハ俗ハみハ加ハ小ハ拂ハへハのハ具ハハハ如ハ年

拂ハふハべハ今年無ハ支ハふハ送ハつハとハ未ハ年ハとハ待ハそハくハ又ハ年

と加ハふハきハ祈ハ禱ハふハ其ハ身ハ竈ハ公ハ祀ハ五ハ雜ハ俎ハ俗ハ皆ハ十

のハ凶ハ年ハとハらハふハまハつハ竈ハ公ハ祀ハ五ハ雜ハ俎ハ俗ハ皆ハ十

祀ハふハ謂ハくハ竈ハ神ハのハ夜ハ天ハ上ハつハてハ一ハ家ハのハ善ハ惡ハとハ以ハて

天ハをハ奏ハとハ是ハ日ハ婦ハ人ハ女子ハ存ハとハ持ハスハ云ハくハ俗ハ猶ハとハれハとハ竈

公ハとハらハふハ萬ハ畢ハ術ハ云ハ竈ハ神ハ晦ハ日ハ天ハをハ掃ハとハ人ハのハ罪ハ過ハ

白ハとハ酉ハ陽ハ雜ハ俎ハ竈ハ神ハ六ハ女ハありハ常ハ月ハのハ晦ハとハ以ハてハ天

冬か

ふ上り人の罪と白む犬あつりの八紀と奪ひ小あまの
算と奪ふ。○我俗十二月下旬修験と招きて竈神と祭
るこれと竈被又竈注連
とつ五月九月又つれし、**寒の入**
大寒小寒此兩日
小豆餅と食ひ北

越の俗是と**寒念佛**
滑枕言雜談傳へ聞ふ往
寒固とつ、
古よふありしとあり京田

舎て僧俗は限らざり寒三十日曉天よ及びて山野ふ
出高声よ念仏と唱ふことと寒念仏といへ近年室
よ及びて京の在俗男女老若と隔てて五三昧

廻りて寒夜よ鉦とありて行粧喧ま、**寒**
垢離
修験の徒寒中道路並橋の上ふ立ち水と
あび銭とむふあり是と寒垢離といふ是寒

中の水**寒聲**
奇曲よ遊ぶ者寒中朝暮大
行あり、
声と發むこれと寒声つとあり

或ハ寒**寒造の酒寒曝**
時珍曰酒ハ臘月
習と云、
釀一造る者數十

年と経て壞とさるしことと老酒とらふ**紀事**此月
寒中新井の水と汲み桶或ハ壺ふ盛てこきと収め

畜ふらとと寒水といふ五穀及び諸菓生姜ホの物と
漬て後陰乾まもことと寒とらるしこととあり、

寒の雨
寒中の雨といふ、
鳥
羽の田つや寒の雨 芭蕉

や居合とらる**寒の内**
のら猫のこゝろの
まや寒の内浪化門

菫とつれぬる、
松營
飭松賣 **紀事** 山人稚松翠竹と賣松ハ
飭竹賣 子の日の松と称し竹ハ飭竹と云

竹の子
この部孟宗竹
の糸と注を、
貞享式掛乞
と云とさるる

まど今の例よハ秋の
よ **兼衣物夜興**

引 **十月吉田祭**
此祭一年兩度あり、
夏のよの部ふ注を、
十二月

引 **十月吉田祭**
此祭一年兩度あり、
夏のよの部ふ注を、
十二月

吉田大夜
節分 **紀事** 節分の夜ト部家吉田の
齋場の内陣とて清夜と修む神

冬 **かよた**

人一人これに従ふその式四月十九日の夜の行法は同じ
し節分の朝ト部家宗源殿小於て神道護摩と
修も疫神齋札三千枚と出
諸人求めて門戸貼あり
た 十月 煖爐

會 部の部 達磨忌 紀事 梁の大道二
年十月九日入寂大

小の禪刹悉くこれと修も元亨釈書達磨者南印度
香至王第三の子蕭梁普光元年庚子支那ふ来り
武帝のころ小茅一義と説帝契つと乃江と渡り
魏ふ入高山の少林寺小居九白九と経て天竺小帰る
兼

三叉物玉の塵 玉の唇同じ たいり雪 此部
雪の条よ 垂氷 注不 湯婆

併せ注と 炭團 及 湯婆

和漢三才圖会大年保唐音欵按湯婆銅と以てこ
と作る大き枕の如くありて小き口あり湯と盛褥の傍
ふ置て腰脚と煖む因て婆の名と得と竹夫人と此
と寒暑懸隔の重器とまの黄山谷湯婆詩云小姬

暖足 足袋 草の 和漢三才圖会單皮足袋俗踏
鹿の皮と以て半靴と名つけく多鼻と今野人
二字と用之く凡冬ハ皮と用ハ夏ハ棉とりもハ
大根引 集解六月種と下し秋苗ととり冬 堀春
の初角と結ふ貞享式大根引此詞ハ冬の常用あり大
根と畧して音語よむハ京家のやない引ふ效ふハハ
刀息 部の部 鷹 時珍曰鷹背撃と以て
故ふられを膺とハ其頂ふ

毛角あり故ハ角膺とハ其性猛爽故ハ鷓鴣といふ
大和本草鷹鳥の類三種あり 鷓鴣の類鷹の類 鷓鴣の
類ハ和漢三才圖会鷹の尾十二枚長五六寸よく
合て未ハ四ハ黒白の重紋あり天寒ハあつとこハ尾ハ
疊むと一枚のどくも尾損傷ハ遇とまハ漆樹の汁と
取て他の鷹の尾と接尾の下ハ三品の毛あり尾末毛
とハハ乱糸狭衣下の尾と石打とハハ尾の端の白者
と杓華といハ背の毛と母衣毛といハ其腹ハ出る白

冬、 冬、 冬、

冬、 冬、 冬、

格ハ野山ノノにて結ムスハ一切立木の枝エのあふ外ソノ樂ガク

ハゆめりの枝エあて羽ハネさつりゆめりノ又樂布ガクノハ羽ハネ垂タラシ

とハ垂布タラシハ似ニ入マ、鷹トビ韮ニ和名抄ニ韮ニ和名太ニ加カ管ケツ

家の紋イデノふと染シス、鷹トビ韮ニ衣也ニ鷹トビ三百首抄ニ公方ニ

家イデふたけと、鷹トビ揺ユ同上ニ鷹トビおよりハ、鞭ムチより長ナき

子コさつり、鷹トビ揺ユのあり、夜居ヨルの時トキ鷹トビさつり

て寐ネせぬ道具ツグ、當時トキ鷹トビの薬ヤク柳ヤナギの露ツキ切キ壺ヒラの

ハ鞭ムチとこのまよく用ヨウふる、鷹トビの薬ヤク水ミヅ夜取ヨル水ミヅ恩オン

沢水ササヅミ條吹ジョウフキ鷹トビ鷲シウ經驗方ケンケンホウ柳ヤナギの木キの上ノ小虫コムシあり、状シマち

錦ニシキの帽子カビ鳥トリの卵タマゴの如ニくして斑マダラ文モンあり、其ソノ虫ムシと取トルて

水ミヅ子コ持モて食ク和ニし、これと飼カふ小神功コカミキありといふ、○切

壺ヒラの水ミヅ、柳ヤナギの露ツキ一ヒト条ジョウ基キ房ボウ御鷹ミトビ飼連カミツネ哥抄カガキ切キつらの水ミヅと

ハ鷹トビの葉ハあり、桑クワの朶ノボの切キ口クチふとあり、こゝ水ミヅあり、柳

の露ツキ、これハ葉ハの水ミヅとあり、○一ヒト説セツハ夜取ヨル水ミヅ、恩オン沢水ササヅミ、意イ

慕ホシ水ミヅとといハ皆みな女メの經水キミズのとあり、○條吹ジョウフキ鷹トビ三百首サンヒャク

抄セウ篠吹セウフキとハ青竹アヲタケとめめて切キ口クチよりいづる意イ氣キふく、

鷹トビの羽ハネのぬめると直ナまといハ、○錦ニシキの帽子カビ同上ニ

錦ニシキの帽子カビといハ、いづれハ色イロよき紅葉カキハジメと取トルてとせ鷹トビの

風カゼと洗シふ、鷹トビの經緒キヨヒとせ、鷹トビ書カキ經緒キヨヒとせといハ

といふあり、鷹トビの經緒キヨヒとせ、付ツてとあり、經緒キヨヒハ鶴ツル

より小コき鷹トビよりあり、大鷹オホトビやとせき繩ヒモとせ、

四十尋シヨウジンの繩ヒモあり、九ク經緒キヨヒハ二十ニジュウのうあり、鷹トビの

餌袋エツブ鷹トビ三百首抄サンヒャク水餌ミヅエとハ洗シひ餌エのとあり、王オウ餌エ

をくり付ツてといふあり、餌エといハ架カふ餌エ

飼カふといふあり、鷹トビ犬イヌ打餌ウチエ犬イヌハ三品サンヒンあり、田犬タノイヌといハ

田犬タノイヌ則スな鷹トビ犬イヌ、○打餌ウチエ鷹トビ三百首抄サンヒャク打餌ウチエとハ犬イヌの食

物モノあり、犬イヌハ野山ノノにて飯イ糠カとまかせて餅モチの如ニくして、

鳥トリと立タつ、竹タケ尾ビて魚イサと取トル具ツグあり、その形カタチち丸マルき

時餌トキエあり、竹タケ尾ビ小籠コカゴあり、て口クチよりらりあり、沈シヅむとせ、口クチ開キき、引ヒ上ノる

時トキハ口クチ閉ヒ、是コノ餌エと入イて、湖底ウミソコハ沈シヅめ、かきて雜魚シラサギ蝦エビと

取トル、元もと冬フユ月ツキ多オホ、湖西ウミニシ堅田ツツタの漁船イサノフネ一艘イツボネハ竹タケ尾ビ數スバ百ヒャクア

積ツミ沖シメ漕カ連ツ出デてとせ、と沈シヅむ、漢人カンジンの産ウツ、芋環イモノハシハ釜カマ

字ジと用ヨウハ非ヒ、釜カマハ口クチよりあり、て流川リウケンハ

短日タンニチふせて魚イサと取トル具ツグあり、とせ、ハ大オホ違チガふ、

冬フユ、

た

月令廣義漏刻盈四十一刻夜東医室鑑杏

五十九刻杜詩寒日經蒼短魚俗名大口魚

大和本草大口魚北海の海ふ多し南海ふハ生せど

西州ふハ北海ゆも生せも朝鮮ハ甚多し寒国ハ生せど

冬春多く捕和漢三才圖會夏月全くふし故

小俗鱈字ハ作味鮮魚ハ佳らむ庵て甚佳し

ことと塩鱈とり其鯛煮て食へし或ハ酢ハ浸し

食ふもま佳あり○雲鯛吞魚の鯛雲鯛菊鯛

カ小形色と寒氣と禦せんふ

以て名づく飲之依て季を

十月

當麻祭十四日○一年ハ兩度あり夏鎮靈祭

中寅○吉田八幡の祭公事根源この祭ハ人の魂

魄の離遊まを招きて身中小鎮の奇特あり

宇摩志麻命よ智惠の粥智者大師の

起まりとど大師講忘日廿一日

より廿四日ふ至る諸山大師講と修む比獻東嶽日光

の三山廿一日より廿三日ふ至るまで昼夜法問あり

と論議と一山一院づ会場と勤じと天台会

とり俗もまと大師講と修し各赤小豆粥とと

枯柴と折て箸と是と智惠の粥とと松祖通載

天台智者禪師開皇十七年十一月廿四日寂大師

諱ハ智顛字ハ九十一月中旬よ

德安潁川の人下澤庵清製大根の澤并

清と製も青藍云沢庵和尚とめとこれと製

を故ふ名くとつり愚按まうん沢庵和尚の墓所

武江品川東海寺ふあり無縫塔と丸き石置の

と大根清の壁丸き石と置るとなと沢庵和

尚の墓所の形とよく似と

と故ふ俗沢庵清といふ故十二月大德寺

開山忌廿二日大德寺山城国葛野郡紫野心

和漢禪刹次第大燈国師行狀云師諱ハ妙超宗峯ハ

其子あり播州揖西縣ふ生む紀氏の子父母觀音大

士ハ請て誕生む十一歳の時同國書字山戒信律師

と師と成長して不立文字の宗風とと中畧建

冬 たり

武二年十二月 宝船敷 紀事 節分の夜画船と
廿二日逝去云 白紙貼け諸臣賜入

地下良賤も画船と表の底は布で寝る今夜吉夢
あつときハ来歳福と得たらハ悪夢と見るときハ翌朝

これと流水を付て悪夢と流すといハ和俗この船の内
小種々の珍宝と画くがゆふ小宝船と称し近世これと

梓銀て兒童市中に賣る 居家必用 船に乗日月
入と夢る時ハ吉船を渡ると夢るときハ大富貴を

主る云○今の俗正月二日の夜小宝船を布ハ 鯛味
元禄年間より遙か後のよりりぬる

噌 鯛味噌ハ肉味噌と同じ **礼** **る** **十月**
酒を以て煮熟して食之

袖の時雨 涙の雨をいふ同 蒼向麥
涙を袖のぬるといふ也

芥 新蕎麥と秋 早梅 范至能梅譜云冬
一、芥と冬と也 至前已開故得早

名要非風 **兼三冬物** 雪車 北越雪譜をも
土之正 此輜といふ

物雪國才一の用具あり人力を助ると船と車も
同じ且作るに易き一面とて云ふ 形輪か

如し大小定りあり我る物もちて我國の雪冬ハ凍らざる
がいて造る木材ハ堅木を用ふ さき地車の

ゆふ冬ハ輜をつらハ雪が落入て搦事あるハ輜ハ春
の雪鉄石のこく凍る正二三月の間は用ふきも

のあり其時よると里俗輜道はありしといハ俳諧の
季寄小雪車と冬とを誤る あやま といふと雪中の

物あれハ春の季ハ似気あり 古哥 小多く冬ふあり
実ふふと冬とて可なり 山中蕉 といふ

薪と雪車も積も引歸ふ或ハ山小曲りあるハ件の如く
小縛 薪の輜 乗片足と造りてこれて輜と

と云 船と走らるる 此術学びて自然に得ると
ころ輜と引あはれらるる哥と謠ふこれと雪車哥と

りハ則推哥あり 漸 その家よりつくとときこの妻子
その哥を聞て夫の帰れりと知て出迎へたをけり家

小至りむの青藍云俳諧歳時記小近來雪車の句
作あると云ふ小多くハ雪車に乗といハ雪車ハ薪と積

のこ人の乗ありくりのふありと云 つら といふ

冬 そ

堀川後百首 そのとゆとやりふけりなあらち山越の
い人雪車ふ乗す 曠野集 夜とて雪舟ふ乗
らるるありうか 此外先吟あまのこわれ
たへ 實事 たふふとものうら 蒼向水湯

本朝食鑑 蕎麥と用て熱湯ふ撒し 拌勻徐これ
と飲めむ 寒と禦といふ 然れども 蕎麥性寒 寒と禦と
の理あり 惟熱湯身
と燻むる故なりん **十一月 園韓兩神祭**

中の丑〇一年ふ兩度あり 春 **つ 十月 大莖**
のその部とるべし

の花 俗よつぶとこといふ 本草綱目 款冬花の條
下云一名索吾 天和本草 莖葉款冬ふ似
たり 一名山吹とらふ 世俗は庭中ふ植て 玩ぶ 秋黄花と
ひらく 冬ふ其実房とありて 數の顆あり 子キとらふと
葉厚として 光あり 冬も莖葉ありて 枯とて 其莖と
食する 小味フキの如し 皮と去て フキの如くとるべし 此
れと款冬との入あり 誤ん 今按るふ 急就章ふ 索
吾 款冬は 似て 腹ふ糸あり 陸地ふ生る 花黄色とらふ

是つし **兼三冬物つら** 垂氷 友人介我云
あふし づらふづらふ

のつづまりつらふ 氷のまづる形容あり 尾張の家産
わとるえて 氷まづる形容とらふ 源氏末摘花 朝日とて
軒のくさくさいとけあがりなるとつらふのむとらふらん 此
外證哥多し なるい 落る雪のまづる氷りるるとらふ 俗
つらふといふもの 是あり 新古今 立めり 山のづくも音
たえて 槇の下葉とたふい あり 此まづるも 舟とて
さるをつらふ 氷のけちめり 古人も句作せり 氷

俗談平話ふとらふ 故あり 強て 改むべき あり あり
〇銀竹 岳氷の異名と **綱貫** 滑稽雜談 當世
つらふきの部とるべし 早賤者のそく 綱

めきと 称するもの 往古とて 遺凡と轉じ
牛の皮とて これと造り 履底に 鐵とて 釘せ 物
云 今雪香といふもの 是あり 炭俵
付 綱貫のいねの痕あり 雪の上 **頭巾** 袖頭巾
御高祖

頭巾きき 頭巾きき 頭巾 きき 頭巾 中 二名一物あり 面骨
丸頭巾 十と頭巾

冬 つ

董集ふこえへ今つん芝翫頭巾ふ似る、**五元集目**

中一名御高祖頭巾といふ物、**用捨箱**袖頭

空曆八年の写本、愚痴拾遺物語、一兩年以前より

坊主品川へ通ふ高祖日蓮上人のうづり物より思ひ

つぎし、〇九頭巾、今つん大黒頭巾

のころいふ、**露氷** 氷

つゝたき **雀鷄** 和名とあり

つゝたき **雀鷄** 鷹或つと

悦哉、**雀鷄**の雄み **月の氷** 御傘冬ちりたき

属、**雀鷄**の雄み、**月の氷** やのあまるとり人水辺

ふわり、但し氷お移りくる月の句体あつた水辺

べし、**新撰六帖**いひまゝのつじの寒ぬれど水

あつた空の水 **月牙** さゆるとい

る月影、**月牙** ひて冬あり **十二月月次**

祭 十一日〇一年は兩度あり、**追儺** 鬼中ひ**周礼**

夏つつの部るべし、**追儺** 方相氏

ハ黄金の四目あり、玄衣朱裳、**と執り、楯、揚、百、隸**

と叩ぬ時、**五雜俎**、**雉**ハ以て**疫**を驅く、百人最

と行、**護童**、**假子**千餘人、**王**建、**詩**、**云**、**金**

吾除夜進、**雉**名、**畫袴**、**朱衣**、**四隊**行、**これ**今即民間

この載あり、**但**、**再**、**鐘**、**燧**と**燃**、**爆竹**といふ、**公事**、**根**、**源**、**天**

舎人寮鬼と勤り、**陰陽師**、**祭**、**文**とりて、**南**、**殿**の**辺**、**り**

著て、**こと**と**讀**、**む**、**上**、**郷**以下、**こと**と**追**、**ふ**、**殿**、**上**、**人**、**御**、**敷**の

方、**小**、**立**、**桃**の弓、**蓋**の矢、**つ**、**こと**と**射**、**る**、**〇**、**雉**、**ハ**、**江**、**次**、**才**

裏書、**雉**と行ふ、**晦**、**日**、**ふ**、**前**、**つ**、**こと**、**二**、**日**、**公**、**事**、**根**、**元**、**晦**

日世、**諺**、**問**、**答**、**疾**、**囊**、**抄**、**小**、**節**、**分**とあり、**按**、**ま**、**つ**、**小**、**中**

華、**あ**、**の**、**金**、**五**、**口**、**除**、**夜**、**進**、**雉**、**名**とあれ、**節**、**分**、**後**、**の**、**こ**、**心**、**也**

兼、**二**、**冬**、**物**、**葱**、**根**、**ふ**、**天**、**和**、**本**、**草**、**大**、**葱**、**ハ**、**五**、**月**

分、**裁**、**冬**、**春**、**さ**、**り**、**ふ**、**り**、**肥**、**地**、**ふ**、**ふ**、**く**、**う**、**り**、**て**、**漸**、**々**、**ふ**、**培**

白、**根**、**長**、**大**、**云**、**故**、**小**、**根**、**ば**、**う**、**と**、**称**、**ス**、**又**、**曰**、**和**、**名**、**抄**、**小**、**和**、**名**

紀と云、**紀**の**一**、**字**と**名**、**々**、**子**、**祭**、**子**、**燈**、**心**、**大**、**黒**、**天**

故、**小**、**一**、**名**、**一**、**文**、**字**とあり、**子**、**祭**、**子**、**燈**、**心**、**の**、**祭**、**心**

冬、**つ**、**ね**

紀事 凡商賈此月日子時ふこまを祭る蓋賣買の間に利を取と鼠の子の蓄息ふ比せんと欲する子小供する所の膳食品毎小大豆と加ふ又二股大根と供きて大豆ハ鼠の好む食之兩股大根ハ俗福来と称ま○子燈心和漢三才圖會每十一月子の日るを貯るふいまごその擧と云くま

十月

年貢納

滑稽雜談 秋收こむりハ秋月侍るよふ當世多くハ冬月迄ハ皆済まあり

惣しく一年中貢ぐりの數多あれむ句体よりて雜ふあづし○青藍云年貢納といふこと増山の井及び芋環ふこれと載せもあつりといふこと炭俵集今の間は雪のふることさしてさうといふ前句は年貢もんごとほめられもろり芭蕉又千鳥あふななく小寒らありといふ前句ハ未進の高のまてみ昇用芭蕉云いづれも冬季まつれり

な十月涙

の時雨

涙の雨まじり名の草枯る秋萩七萬

あとのかゝるとんよひあまき

兼三冬物生

海鼠

和漢三才圖會 按るハ海鼠中華

金海鼠の海中ハ無之遼東日本の熬海鼠と見て未生ありものと見む故諸書ハ載する所さふ熬海鼠あり本朝ハ神代より既ふこれあり回事紀ハ云彦火瓊々杵尊の時諸魚皆仕奉りといふ而ハ海鼠こそこと天の鈿賣の命細き小刀を以て其口と拵く故今ハおいて海鼠の口拵る是也中書骨鱗尾鱗あり皆田ありて浅青色又黄と帶ふ者ゆり畧虎彪に似たるを以て虎兎と名く全体疣多し滑軟其腹扁くして白色常ハ水中ふありて身ハ薄く扁くよく水底ハ游行を如し物ハ觸るとさハ横ふ縮ふ水と離るふ至て半片の胡瓜の如し其口折て齒腮あり其目切て珠ふ光あり共ハ小刀の痕の如し冬月盛不出ツ春月の終ふ尽く金海鼠ハ奥州金花山の海辺より出金色と帶ふ故ハ金海鼠と名づくこのこと天和本草庄海鼠の条云其腸黄みして長し

冬、ちよ

醃あかとを味あじうし、**鍋焼** 貝焼 皆其食物の調味と温あたたかるの事と云ふ

とめふ是 **納豆汁** 本朝食鑑 穀名納の字未詳 或いは僧家の庖厨と納豆とを用ふ

号納豆ハ近代僧家多く造る故ハ此豆 僧家の納所より出ると以て名づく云 十月 中

山祭 上卯の一年ふ兩度あり 夏なつのふの部ぶに注しす 十月 内侍所

御神樂 公事根元 天子内侍所より行幸て御拜あり 殿寮幔と引く官人庭火と云ふ本末の座と二行ふたり設

く云 紀事 官人内侍所よりして鈴と上る是神樂と 奏そうる義は御供米と云ふ事と御久米と云ふ事の人鈴

の音と聴て伎ぎりふ鶏鳴とありて帰る事と云ふ といふこのどくもさきさき來年

何方いづか向むかひても障さや障さや礙ありといふ **あまの頭** 肥前國長崎と云ふ所の餅搗の日ふ終

の条じょうも出です **長崎の柱餅** 肥前國長崎と云ふ所の餅搗の日ふ終

の一日の餅と家の柱はしらへまゝと付つけき正月十五日左ひだり義長 事西鶴にしやくの世間胸むね算用

雨 **りむ** 十月村時 漢土わんの秋種と下したる本邦 十月種と下したる四月熟うる

兼三冬物六の花 雪の事ゆきの韓氏かんし外傳がいでん 九草木 の花多くハユ出でる雪ゆき化かれ出でる

朱子語録 地六ハ水の成なり鼓つ雪 **十月宗像祭** 水結かひて花はなと云ふ故ゆゑハ六出

社啓蒙 胸むね肩かた社やしろ云々 一説ハ宗像郡田島村たじまむらの三神共みつがみの 筑前大和山城以上三所ハ宗像の社あり三神共みつがみの

素蓋すくき鳥尊とりのみことの女むすめ田心たしん姫ひめ瀧たに津つ姫ひめといふ **室** 室の内むろ或あるハ土藏つちぐらの内うち炒火あぶりと儲たくわけこまこと

咲の梅 暖あたたかむる時ときハ其火氣あか感あへて忽たちち開ひらくこれ

と室咲むろの **十二月 胸搞** 俳諧歳時記 むむららむむ 年の暮ゆふ人家いへの門かどと云

冬 らむ

唐とあらし手と以て胸とくき節季とひらつく
といひて錢とくひりありこれと胸稿の二番職
人寄合ふその面残まり今
節季はといふ者長あり云

十月鶯の

子 鳴 貞亨式 此名古抄より啼の字と結
びて冬とあせんと鶯の子啼ハ名

目も長々まじ啼の字まこと冬とくきむべし彼を
冬至のころより鳴者ふゆふ其子ふ冬用のあまハ
ありまのて鶯のま啼といハ子の字あも及まじき
之の青藍云俳諧歳時記ふ冬日鶯數中ふ鳴これ
とく鳴のふい云此説おとやふらむ愚按むる
さハ少しの義鶯の子の鳴あらはどのかやるる

兼三冬物打餌 鶯の部雁大 浮寝鳥
の条ふ出ツ

みの部水鳥 薄氷 詩云戰々燒々
の条ふ出ツ 如履薄氷 埋火 拾後

遺埋火のわりの春のこまら 散
くも雪と花とこそまき 煮意法師
りるるえ

くく各こ鱈の属ふる鮑ハ俗字ハ正字未詳此魚目
大りて潤ふて名をも河洲の海濱ふ多しを養
みして京師の市あひまこの多く来るをま季ふ
用ふの青藍云猿蓑集ふ二番草取むをここ總ふ
いでこしる前句ふ灰打くくこ一枚や
りふ附われ句体よりて雜るるる

梅宮祭 上卯の一年ふ両度あり
梅宮祭 夏のうの部ふ注

晦日 九条東洞院あり則宇賀の辻 縁ス
雍州府志 九條鳥丸宇賀の辻云 兩所ともふ宇賀祭

の儀ふし真言家の書ふ任吉の土俗十一月晦日家事こ
棄て専ら倉稻龜と祭る古の遺凡ありこここあり

探梅 無言抄 早梅と尋る心ふり 馮字上探梅詩
一枕悠々夢覺遅疎簾花影半陰移起未

檻外探春信開到東軒第幾枝 打寄て花入と
ふも梅椿芭蕉翁此句と出されふ各春季の服え

らもこ心羽甚むつりて時物の表と聞て一句の主人公
とらふまこと日頃のうらみ愛く冬季の服こそと

冬 ころの

申されたるは降こひまらふ
初雪の宿と付りて
十二月 温槽粥臘

粥 八日増山の井五山とて入禁中と有り
行事 温槽粥 醴 饒 粟 菜 フコニキリワカシテ
并ラス云、**三水記** 本朝にてハ臘八粥と温槽粥と名く
今日造る所とてハ昆布串切 大豆粉菜と相合し

と製し是叙尊成道の日あり **傳燈錄** 叙迦佛
檀持山とて非非想と學び二月八日成道
夏の五月ハ

夢梁錄 十二月八日と寺院にて臘八のハ大
刹等のま俱ハ五味粥と説く名ハ臘八粥云 **波女等**

滑稽雜談 廿日より乞人の妻女白棉巾と以て頭面
と覆ハ腰ふ赤き前番と掛手ハ藍と携へ遍く人家
と懸て米銭を乞ひふらり波女等と称し廿日小至く

止むとて廿日節季ハ諸國ふあり波女等とハ六京師
ハ吉日と云ふよりハ松葉

抄ふとてハ諸國より献る御調の稻
と十陵八墓へ奉らるるもの使

他所ふあり
の 兼三冬物 鷓鴣 鷓鴣のく
ひをり

十二月 荷前の使 廿日荷前の使 十二月十三日或
ハ吉日と云ふよりハ松葉

抄ふとてハ諸國より献る御調の稻
と十陵八墓へ奉らるるもの使

く 十月 口切 **紀事** 此月良賤あつく茶会
と催し親戚朋友と飲食と具と

壺の口切といふ今月の始より臘月小至る九膳食と
会席と称し家の豊儉ハ随て佳者美味と求めこと
と調花折布小至る迄ことと新おと 中 九茶葉蓋

の間ハ糊と以て堅く紙と貼本風濕茶と侵さんこと
念ふが故あり初冬小至て小刀と以て紙と貼し合縫を
截蓋とひらく茶を取これと壺の口切といふハ利休曰

壺の口切の節ハ橙黄ハ橘緑りの時
○口切や汝とよハ金の事 其角 **兼三冬物**

懷 爐 湯婆温石の類ハ病身虚
弱の人懐と暖るやあり **莖 菁 莖 漬**

本朝食鑑 莖菁の葉莖と採ハ淹菊とハ收藏これ
と莖漬と号し羊と経て又佳ハ江州の製造と近江

漬と号し珍と羊と経て酸味と生むるものお佳
あハ賀茂の里人の造ると酸莖と号しこれと賞美ス

冬、 杞く

朽葉

一説ふら葉ハ色と結びて冬々の朽の字重き故あり

くまら野

八雲御抄 冬の野とのハ〇冬野の枯くまら野とのハ百濟野と混ぶる〇くまら野のさあぐ下ふあく鶴

このものわくふ冬ハ未あなり道因法師

角鷹

鷹の類アリ一大小悍者之全体の形色雌雄大小

皆鷹鳥同し鷹より大あること三倍せり雕小似て小大和本草中上ハ角鷹とも養て鳥捕ふ

枯

草枯ふ手打て

鯨突

和漢三才圖會鯨鯨字海鯨勇魚

伊佐奈 状ち畧鱈小似て肥て山く長く周りと等し其色蒼黒くして鱗あり鼻の上の骨高く起り頂の上頭の前ハ潮と吹穴あり口濶く下唇上唇より長くして領の前ハ出て舌もまろ廣し九鯨六種あり性喜し鰯と嗜し諸魚ハ敵せし海船若尾鱈小ふくしときハ必履も冬ハ北より南ハ行春ハ南より北ハゆく肥州五島平戸辺ハ節分の前後と盛ると紀州熊野浦ハ仲冬と盛るとこれと捕ふ鯨と刺鯨と呼て森

十月 獻履襪

崔浩女儀云近古婦人常小冬至の日と以て履襪

とりの櫛木と以て柄とあり鉾の頭ハ繩と着て船の柱ふつろ其鉾鯨小中るときハ柄ぬけし肉ハ鯨の動作小志とくひて深く肉ハ入て後も鉾の柄枝るといふも繩着てある故ハ失ふも一船の進退と掌と人と呼て柄指といふ長き袖短き袷と被て宛も軍船の如し近頃大繩の細を用ひて豫めと繫ぎ木柱と擲故ハ百一失

空也忌

三日曉の鉢叩 空也上人ハ天禄末禊あり 三年九月十一日

寂も年七十と元亨秋書ふとそり〇空也堂ハ極樂寺と号も四条坊門の南堀川の東あり鉢叩ホ此堂と守ふ傳ハ云極樂寺ハ元三条掃部あり掃部道場と称もむり空也上人勝光夜々執行念佛と唱ハ浴中と巡る北山小住ととき毎夜鹿来る上人其声と愛して閑居の友とも一夜来らむ心

冬く

小怪む明日獵者来ア云昨夜この處に於て鹿を
 殺し上人大小驚き悲しむその皮と角とをひく
 皮と衣と角と杖頭と挿して遺愛の物と獵者も
 又こゝを悔い愧て忽ち剃髪して僧とあり今の鉢
 叩はこの齋あり空也晩年修行のころ京と出て東行と
 徒弟の謂ていふ今日寺と出る日と以て予が命日と
 定まらぬ故に其日と以て法事と修むこの院中十八家
 有りその中年老のわの剃髪して僧とあり代々空の
 字と法名ふかふの餘は有髮妻帯あり常小茶釜
 と製し市中ふ賣る九十一月十三日より四十八夜の間
 夜々市中洛外の三昧と巡り各鉦をあり佛名と唱念
 或は竹杖を以て携ふところの瓢とあり口は無
 常の詞と唱へ施物あるときハこの瓢を受く瓢を以て
 鉄鉢を代ふ故に鉢叩鉢を叩くところの竹杖は貴
 船櫃上の竹と用ふ上人暫く北山貴船櫃上の菴に寓
 居の遺意に風俗文選鉢叩辞去云かき修行の瓢
 草とあり鉦打去き一人三人つてもうさひのけ
 合ての瓢ハ其唱哥ハ空也の作あり中畧常ハ杖の先

小茶釜とて大路小路よ出て商中畧ありハこゝろ
 やととまり或ハ四方ふうけ法師あらぬ次の衣引け
 たれど墨染ありありハ萌黄ハ鷹の
 羽打ちくも紋とつけく著く月雪小名ハ甚之
 承と越人も具じ侍る中畧横雲の影ありハ友と
 言して出来たりけふ老と足ありさかめハ友と
 ふとありおかれてひとり今ありぬらんハ翁の長
 嘯の墓めぐる鉢と聞き聞えあひたるハこの曉
 の事ふそえづりる吾山遺稿鉢と聞き瓢とありハ
 て瓢ハ和讃無常とらまら来つとあり誰ハ此苦と
 のらるべき花ありなるよとわいさとの名をうと
 残るは此外和讃多し略之此哥と志をうと哀
 小説いつて
 勸進去る
十二月 藥食
 鹿鹿と食する者穢忌多し此如茂春日の神使
 の故に故に世人鹿の訓と忌む言を以て鹿ハ鹿
 肉甘温めて毒あり冬時小食ふべし他月宜しうら
 ごと故に寒中特小用之中と補ひ氣と益一切の凡虛

冬、く、や

と療し血脈と調ふ故小是と葉
食の諸獸も又さきと食ひ者
や十月八

手花 大和本草葉の形莖葉の如く又かつこの葉
の如くして甚く大なるこ盤の如し冬樹落

む葉のりこ一ありて岐多し七八はわらるる白花を
開き黒き實あり毒あり木の高五六尺小過ぎ

三冬物 山眠 即遊録冬山慘淡
十月山

科祭 上巳日〇一年小兩度あり
夏の部の部小注
山神樂

内侍所の神 **山の神祭** 神代卷伊弉諾尊
軻遇突智命と斬

祭の山の神の社の辺の樹上小幣と
きりつけ神供と備へ燎火とく

十二月厄 節分の夜吉田神祇官ふりて行り
その式庭上小塚と築くといふ厄塚と云

正月十九日小至 **厄拂厄落** 紀事四十二歳の
男子自ら犢鼻褌

て解拂ふあり
と落ま是とふらうやとふ厄と拂ふの義あり

宵乞人綿巾と以て面を覆ひ自疫拂落と称し
終夜街衢と往來を〇唐土の丐者のやくとらひと

巡り銭とともふとと打夜胡と名く又驅祟の類

目鱧取 和漢三才圖會八目守奈岐北国の川沢ふ
多し大抵尺をり大なるもの二三尺背

蒼黒くして光あり腹の色稍浅し其首尖らば口裂
をじて田く齒細小く針鋒の如し兩眼の後小各

七點あり目の如く星の如く錐の穴の如し目とこりふ
八數あり故ふ名く〇江海處をふあり信州諏訪の

海小取りのを名産とせし上諏訪下諏訪二里あり冬月
氷もちて厚さ二三尺よ及ぶこの時に至りて鱧と採る

先氷の上よ小家と營む小火と焚て穴と穿ちその穴ふ
柱と建漁者の休し所とせし又細或ハ繩と入へき穴を

冬 ねまけ

穿やとふ焼火を以て延繩と入共餅を以て鉤

ま 十月 松風の時雨 松風の時雨の音

兼三文物 週炭 凡茶会の炭又花ハ上手

花と 十一月 當宗祭 上卯日 松尾祭 同日

十二月 豆打 世の部節 分の条

注 十月 玄猪 亥の子の餅 御覽

初冬其月亥子建を亥の日亥の刻餅を食

へむ病ひあし 錦繡万花谷 此餅と食ハ万病を除

く政事要畧 亥多子ある者あり毎年十二子を生

ひ閏年ハ十三子を生む故婦人ことと羨とく此

日小至の餅と供して神と祈る○のの子の事其始

詳あらむといども延喜式を載らむとれ古くより

麻栗柿糖此七種の粉と合せてつくると正親町

公通卿の抄并御湯殿記亦よその式委しくとる

○一説小撮勿能勢郡木代村小門太夫といふ者任せ

ふ起まりむ此所及び切佃大丸の近里ハ山城八幡

の神領よりよけて今善法 下元日 水官解厄書

故事 正月上元ハ天官福と賜ふ七月中元ハ地官罰

と赦ふ十月下元ハ水官厄と解ふ事文類聚正一

上旨要云下元三品厄と解む水官主祿百司人

間の善悪を檢察し天闕に詣り進呈す

十月 冬ころ 一書小冬ころと立 冬牡丹

天和本草 冬牡丹八月より葉出て十月より花

臘寒の時も花あり元如此あるハ人功を以て天地造

化の力とぬきとこれと成怪じり
[兼] 冬物

穠叢 此寒と牡丹の花のまの標集
[北] 越雪譜 暖

雪吹 雪爪相交る
[北] 越雪譜 暖

玉海集 哥枕とてよまらば 衾雪 山姫の寐道具ふ

水と蔽いたるを氷の衣とらふ同く 雪の物と 富

厚く蔽ひ包むると衾とていふもあらず

士の雪 御今ふはやどのぬふらふけの雪はみひ月の

の哥と引て雑とて 無言抄 小赤人の田子の浦の哥

新古今冬の部小入りとて冬とて句体やよまらば 但し

毛吹草 小あひ草のこひまをて 冬季 衾 古き衾 厚衾

敷衾 小衾 和漢三才圖會 衾寝衣 古き衾 哀情

紙衾 あり 白氏文集 鴛鴦尾冷霜花重舊

枕舊衾誰與共 紙衾ハ紙少て造つてふるふる貧賤

の者の用ゆる テントラジ是あり 穠叢 たと目ハ我手

のわとぞ 紙 蒲團 本草綱目 蒲席 款名云 薦

衾 曾良 皆蒲及び 稻藁とてこと 柴漬

為る 精粗異なり 兵人龍鬚草とて 席も 柴漬

今縮布とてことと為るとも 蒲團とて

正字 罽 冬小魚と取ふ 柴と多く 緘ひと

内小餌とこれを江小沈り置 江中の魚集り入其下

小をくひ 綱と入引上て 取あり 城州淀伏見の江

多くことあり 夫木 うつけしをら下小まひま

のんとまれき身と 河豚魚 腹立鱈 古方

豚ハ猪の小さ者其性よく 噴る故小憤豚の称あり

魚中 鯨鮫まことよく 噴る故小河豚の称あり 北山經

其腹臆と重じ呼て 西施乳とて 陶覽云 河豚魚

小こととてと 獺及び大魚 敢て啖をも 惟人小毒

のふあつても 又よく物と毒を 煮るときハ 煤焙中ハ落

る事と忌む 肝及び子ハ 大毒あり 食べると 滑管

冬 小

雜然和産小腹立鯨して河豚小似て小き魚あふ味い
劣る是と地小投又ハ木の枝と以て動々候ときハ魚腹
を立て鞠の如くふふくくくこれ本草小云鯛魚腹脹
大口緊りて泡の如しといふ是あらん難波の浦又
蝦の浦あふふふ待ふとらん河豚の類あらん冬
季小用ふべきなり○俗鰻字と用ふ誤鰻ハアヒ風

呂吹大根 骨董集甲陽軍鑑云熱風呂好
よく吹申さる云 本朝諸士百家記凡
呂とめてあま糸云上手の吹手一兩人云伊勢人の
物語と聞ふ風呂と吹つりハ空風呂ふあつて垢と
吹くもの風呂ふり者の身上小息と吹うけて垢とく
ありあつて息と吹うけて所小潤ひ出て垢と落
るありあつて風呂吹とふと云て大根と熱く蒸
して煙の立ちあつて大根の風呂吹とらふ息と
吹うけて食ふと云ふは凡 寒風とせきと
呂吹ふ似くもやあらん **冬籠** 寒風とせきと
居室小籠ると

新撰六帖あられありとみの岩屋のふりりのわら
けつりのとるをとりて **西灰俵** 金屏の松の古き冬籠
芭蕉○草木の凋冬枯るとも冬籠と云 古今の
あつて冬ざりせる草も木も春ふとらるる花と咲く
貫 **冬構** 寒氣を防ぐ料小風のうらふとらるる
之 砂かけ風よけて北の方小蓮と張ま
すべく冬向の弁 **冬の蠅** 續虚栗あくまれてあつ
利と構つるあり 人冬のこゑ 其角
冬の蜂 猿蓑今ハ世ともひけ **冬の梅** 寒梅
大和本草 八朔梅ハ八朔のころよりひらく花小あつてハ
重なり西土とてさること寒紅梅と云冬に至ると多く
ひらく梅の魁あり畿内の寒紅梅ハ西土とて浅香山
の九月より開く八重あり但九月小開くハ花
臘月小開くと正時と云 **冬木の櫻** 可くせし 帚花ふ
も故ふ寒紅梅と云 冬木の櫻 冬木の櫻
冬枯 冬枯 小樹あり花葉彼岸櫻ふ似てその枝
の櫻あり **冬櫻** 垂む冬月花とひらく盆ふうちく
机の傍ふ賞ま又 **冬木立** 夏木立ハ茂つて冬に
八重櫻あり 稀 **冬木立** 冬木立ハ葉の脱落と云

冬
ふ

物と衣といふは同ト、氷の水と蔽ひて居るまゝと云ふら
ていふより、さういふ出せる句意と推ても、但主浪
草入出せる説ハ、**氷の花** 酉陽雜俎開成の末河陽
附会といふべし、黄魚池の水花をさういふ

如し、**凍** 注不 **凝鮒** 煮凝 遠近集煮つみこや
ひることゝつゝつゝつ

鮒者て凝と **火燧** 置炬燧骨董集火燧といふも
のハ近むういふことゝ

ののあり火燧のあき以前ハ物ハ尻うけて火鉢少しと云
燂めりより古き絵巻物ハその体と云ふこと 猿蓑

こつゝ旅のそら **木の葉** 落葉 下くせと落葉
と木の葉松て

や置こつゝ芭蕉 と木の葉松て
りふときハ同ト別ていふときハ少し趣意がひあり其
意と得べし つれく草木の葉落るも先ハ落てめむ

ふハ下よりささづつゝつゝ **木の葉の雨** 木の
とんぼとく落るあり、

葉は時雨 百氏文集風吹枯木晴天雨千載集
まむらある棋の板屋小音ハしてむら

ぬ時雨や木の **木の葉衣** 南越志 撞入冬 鶴毛
葉の 編木の葉と雜て衣と云

太平廣記 女仙部ニ云秦 **このこと** 木の部生海嵐
の時婦人草葉と衣る、 の糸よらえし

兄鷄 鷄の雄あり脚極めて細くしてさきやうに
よく鷄以下の小鳥と捉るありと、

十二月曆の奏 朔日 公事根元 中務省より
明羊の曆と奉ふむくし

ハ主上南殿小出御ありてこれを御覽あり出御あき
ときハ内侍所あつて曆と奏まると云、欽明天皇十四年

百濟の博士が奉ふ 雍州府志 曆毎年南都幸徳
小加茂氏の新曆と受く梓小鏤めせ小行ふ今事

大経師曆と称ま、○今免許と蒙つて曆と取く所
山田勢三嶋 伊豆 江戸 蔵 南部 陸奥 世小南部のめぐら曆

といふ多く **五節帳甚堂試** 中の世 聖則試
日月の識 殿上洲

醉 中の 童女御覽 卯 **公事根元** 中の世の日と五節
狩の使 帳臺の試ハハ常寧殿より

冬 此

山中のついで未申の時むらふ非時として法師より坂
 本へ下つたれば大方寄合て事と名づけ我々世事
 して食をとりひらふ事と載り人按さるる二月の
 日の短き頃去る年の暮の事せりしころの故ふ八日と浪
 三食とあるが當時の僧家の凡俗ありて事納りし
 二月八日の漸あぐれば八日より三度食と事始り
 とのひらひわらるる也 **江戸鹿子** 貞二月八日事始し二月八
 日事納り今の俗二月と事納し二月と事初りゆりゆり
 り正月の式はかたむし事やあはれ云の金公事と
 つらうりて事納り山内此外十二月と事とてめいへの
 證を多し今日いこ者と食と **還電紙料** 料理物語永
 云いこふあがき牛房豆腐芋大根焼栗くまのなと
 りと中味噌やまのしやふみんしや者申ありゆりこふ
 飲とわり進みふ者ふ廻ふ似るこもの通をこてて從
 かに似とあぐりあるべし **月並世話** 戸口小籠といふ
 方相の目よりぞらく邪氣とてりふ事あり云一説ふむと
 小籠といふ八九字のこも云と春の **五條天神** 祭
 この部事始の条ともうりてし

節分勝の餅賣

祭り神大已貴少彦名あり祭礼

白木賣

九月十日小行ふ毎歲節合の夜

京師の士民恭詣多し白木と買てこれと自家に燃く
 又小團子の餅と食ふこの餅社の傍あり勝軍地蔵
 小供もる所の餅ありゆりて勝の餅といふ或はむらひ
 とうちんとゆりゆり名をももつてこの二物舊例ふ
 こりて官よりと賣りむ近世 **曆の果** 曆
 その料と社司あはれ製せむしと

卷納 曆巻返

古寄ふ多くあり **新撰六帖**

十月夷講

廿日或

の家例よりて日定らるる商家の徒西宮大神宮
 つる **本朝通紀** 推古天皇九年三月聖德太子始りて
 市と設けし商買とせりゆりゆりこのとき **神** あり
 ひて商買鎮守の神とせりゆり **又此神** 鉤垂る像
 と設る日本紀に載る所事代主命遊行と出雲
 國三穗の寄ふ在し鉤奥と以て樂とせりゆりゆり

冬 こえて

詣の人各争ひ拾うて持
りて自家の門に貼す

十月 殘菊

公事根元 昔菊花の宴九月九日や又
殘菊の宴十月五日ふ行なうりこれ中

群臣詩と作ると酒と
山茶花 和漢三才圖會
其樹葉花實

霜の異名あり 松藏抄 さはひこめ
わくまが宿のませのつらふさうり

蓬はらうと 字彙冷 寒き夜 ○有明
清甚也 寒き朝 あり

寒く去来 寒く去来 寒く去来
車まきのこき者あり車ふ似て鶴
より小鶉とも朝鮮あり

十二月 里神樂 連奇秘抄 内裏の外と悉く
里神樂とらふ私の心に居所ふ

侍川と山神樂とらふとあり 十二月 寂勝寺

灌頂 五日 名勝志 土人云寂勝寺の旧跡八岡崎村
の西二条通の一町をり西ふあり櫻

田といふ六勝寺の其一也 以呂波字類抄 保元三年上
月十五日寂勝寺をて灌頂と始めを行ふ大僧正覺
明とて大阿闍梨とて此寺の櫻と詠むる奇新を古をこ
われてこゝいありの春とてと白川の花の下陰籠

齋宮の繪馬 晦日 齋宮ハ伊勢國多氣郡ふ
あふ今齋宮村あり多氣の

都或ハ竹の都と名く 増山の井 齋宮の樹下道の傍ふ
小き祠あり晦日の夜里人繪馬とて事あり行疫
神とてあひひるまごころや天王寺の道公法師熊野
より帰るさ小この樹下小宮し繪馬の神ありあひ
行疫神の馬に乗るく音とてこの繪馬の神前馳
まるととてかくりつとありさて法華經讀誦の功力
ふよりてこの神補陀落山ふ生じ觀音の券爲とふ
つらうり侍り 齋宮ふ諸民詣て繪馬
と掛ふとの毛色とて未年

歳藏市 江戸日本
橋の東二

の秋の農業と占ふとて

冬 さき

町でうり四日市あり三河万歳江戸小末まで脱士の
才藏と傭ふあり毎年四日市ありこの價とさうとて
傭ふありこの部問見
才藏市ありとて **逆叢** の条もいふし **き** **兼三**

冬物 銀竹 羅山子曰銀竹ハ雨とあり本李白
詩云白雨映寒山森々似銀竹○
垂氷と雨 **切干製** 切干ハ冬月菜菔と切ると糸
と両説ハ **金海鼠** 鼠の部生海
と名く尾州多く製之

北窓塞 漢志大陸ハ北方北ハ
伏シ陽気下ニ伏すと
宮線 荆楚歲時記 晋魏の間宮中紅線と以て
日影と量る冬至の後長きこと一線と添
文昌雜錄 唐の宮中女切と以て日の長短と
換ふ冬至の後常の日ハ比と二線の切と増も **十月**

衣配 年のそとりの料小あつき入々ふ衣と贈り
とりの **宇津保物語** 源氏玉葛の巻ホホとえ

十月 維摩會 十日より 南都興福
十六日迄 寺ホホして

このこと修も **故事** 聖安魯慶雲二年正一位大政大臣
聖廟安穩社稷傾覆ふきもめふ謹て 弘誓と奉し
この会と開く **元亨** 秋書 齊明天皇三年十月内臣
鎌子山階寺と建 維摩會と修も 陶原の家ホホとく
山階精舎と創り 維摩會
と設く 是維摩會の始あり **兼三冬物 雪** 天戴
地積陰温うあるときハ雨くハ寒あるときハ雪とあふ

春秋元命包 陰陽凝て雪とあふ雪ハ五穀の精あり
○六ツの花 玉の塵 衾雪 雪吹 雪吹 倒これ雪、もち
雪かどむら雪、もひら雪 粉雪降、小米雪、以上頭字
の部ハ **雪花** **韓詩外傳** 九草木の花多く五出
洋を、 **雪の花** 独り六出 **弁願文** 正徳永享御
風やあふ夜ひそくふ雪の花 菊伍 因ふ云、此雪の花の
句ハ五月雨やらの夜望とてよ松の月とあふ雪中菴夢
太が句より **雪消し** **紀事** 十月多く雪ハ貴
ハ先吟あり **賤粉餅並ニ菓実ホの物と**

文 **ゆ**

互小贈る是と雪漸しといふ言はうらやま
とれと食へむ寒気と忘るの諧あそびなり 雪ゆきもゆき

御傘みかさもゆき冬あり時雨ふ風のそよよとゆきあり
雪のそよよとゆき雪のそよよとゆき雪のそよよとゆき

雪ゆきの降ふり 雪ゆきの降ふり 雪ゆきの降ふり 雪ゆきの降ふり

雪ゆき空そら 雪ゆき空そら 雪ゆき空そら 雪ゆき空そら

雪ゆきの聲こゑ 新撰朗詠 苔庭木落紅無跡雪確つら
月晴雪有声 藤原明衡ふじはらあきひらの垣かき

小裏表あり雪の声 嵐雪あらしゆきの音ね 藍あい云月令博物ふつ茶ちやふ
静しずふ窓まどありあつる音ねのりり 愚おろ按おさむるふとゆき

月晴つきはとくふ合あむ樹木じゆもく或ある竹たけふ積つみ 雪ゆきあとし
とる雪の風のそよよとゆき音ねのりり

北地きたちあり雪ゆきのりりふとゆき音ねのりり 雷かみなりれ 雪ゆき
ふ應おこむるこやありゆきと雪ゆきのりり

竿さ 又深雪ふかゆきのりり物のちりちりふ立たちゆく雪ゆき竿さと
寒さむ気き指さしと墮おきとゆき 雪ゆき礫れき、
あり 雪ゆきやけ 是こ霜しもやけと同じ 雪ゆき礫れき、

雪ゆき打うち 小石こいしの如ごとく雪ゆきと摺すりりゆくめ 雪ゆき轉ころ 雪ゆき九こけ
投な打うち合あと云い雪ゆき中なかの載のりあり

續つづ鹿か栗り 君きみ火ひくけよま物もの 雪ゆき佛ぶつ、雪ゆき布ふ袋ふくろ、
とゆきゆき九こち 芭蕉ばしやう

雪ゆき達たつ磨ま 新拾遺詞しんしゆいし會あい雪ゆきあて丈ぢやう六ろくのむけとつ
らり奉ほうじて 供く養やうととつゆき云い、

枯尾こび花はな 此こゝ下したふくねひららん雪ゆき佛ぶつ 嵐あらし雪ゆき 雪ゆき獅子しし
○雪ゆき布ふ袋ふくろ、雪ゆき達たつ磨まれれ雪ゆき中なかの載のり作る

張ちやう文ぶん潛せん戲ぎ小こ雪ゆき獅子しし 雪ゆき女によ 深山ふかやま雪ゆき中なか稀まれ小こ女によの良よと
と作る文ぶんあり畧りやく之し 現いまもとれと雪ゆきのりり

の精せいふ 雪ゆきの山やま 雪山ゆきやまと音ねありゆき 雪ゆきの肌かわ
るべし 天竺てんぢくの山やまの名な難がたらん

女の肌をのかわの白しろきを雪ゆき 雪ゆき履つら 注しゆよ 雪ゆき垣かき 北國きたくに大雪おほゆき
ふこととゆきゆきあり

ふるるとり十月じゆがつ初はつより用意よういして人家りやうか軒のきまはりて遅おそま
しきと九こ太た材ざいと立た樹じゆて横よこと結むすひ簀すいと編あみ付つて垣かきとま

深雪ふかゆきの内うち其その陔がと道みちとして隣家りんか
へ通とほむるありとれと雪ゆき垣かきのりり

十月じゆがつ 虎耳こみみ

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

冬ふゆのりり

大き兄鵝の如くして全体褐黒色小白彪の豆小似
 うものあり臆胸亦同色横小白彪あり相対して蛇腹
 の文小似より頭目猫の如く眼の外白圈と作る眼中
 黄赤やてよく旋轉さ毛角小小さ黒彪あり夜声
 梟小似より世俗頭巾と鳴鴉は蒙らぬ或は山羊の
 皮と以て四と作る諸鳥と執る貞享式古抄秋の部
 小入られ渡鳥やあわらげ色鳥あしらひて鳴声
 の物連さへ寒さを厭へるものあやも決して冬に定じり
 水洞 続猿蓑水うも池の中より道ありこといふ
 句冬気ふつてくもくもく冬冬季勿論ありし

十二月 深山莽草

其木高く上らむ好で偃臥して勝蔓の如し其色
 灰白葉莖上ふ叢生む冬と凌て凋まむ形は蓬萊紫
 の葉小類して長太あり冬梢の間ふ五出碎花と香く
 穂となりて簇生も彩紅褐色の実と結ぶ樟柳小似
 て大し和漢三才圖会ふ深山樗とらるる四月細く白
 花とひらき秋實とひもふといふ同名別種をらん

花景 茵芋深山樗と訓む
 深山背陰の地ふ多産む

十二月 御髪上

紀事 此月吉日とせらる御髪
 行ふ極薦ることを奉る主
 殿官人松明と献衛士と勤む往昔多々午の日
 と用ひらる公事根元藏人御ぐのけりうと給て
 主殿寮ふひり 兼和田の鯉取 鹿文曰此事古
 ひてありあり 式あり偶和及

兼和田の鯉取

武州浅草川常州箕和田とらふ次 本朝食鑑箕和田
 の鯉ハ流と濁らひて清くも江近くも湖に通じ
 魚稍肥て脂も多し里人寒中ふこと捕り理美
 大ある三四尺間漁人小こ 二冬尽る 初冬仲冬季
 んと懐き捕る者ありとを 冬これ三冬

十月

焦糟と食ふ

荆楚の人多く焦糟と 朔日 事文類聚 映人十月朔日多
 食ふあやひ糖ふあま 十夜 五月より 無量寿經 此
 十六日迄 小於し善と修

冬み志

まこと十日十夜あまのい他方諸佛の國土ふ善をあらわす
 千歳ふ勝れり、故ふ十夜とらふ。○洛東鈴声山真正
 極楽寺真如堂天と以て始まき本尊慈覺大師の作
 あり此像冥驗ふりて別時念佛と始むこれと十夜と
 り蓋伊勢守貞國あまのりき 十七日○洛陽惠日山
 也紀事今日古丈ふ什物と飾り午後聖一の像と腰
 輿に乗て寺僧前後ふ直ちうぞう從じゆひ經堂の須弥檀あんちふ安置
 を此開山忌きよひ昨今と年中遊覽の終とを故ふ并當納
 との八聖一弘安三年十月十七日寂も偈くわい日利生方
 便七十九年欲知端的佛祖等ふらり 夕時雨
 傳つた云の真筆と開山堂り揭あ 時雨 小夜時雨
 益夜のわらち多く陰晴と論せむ時々急雨ありこれ
 と時雨とらふ初時雨村時雨泪の時雨袖の時雨川
 音の時雨松風の時雨各頭字の部ふつらて注と○
 液雨時珍曰立冬後十日と入液とらひ小雪ふ至て出
 液とらふ又蒸雨とらふ百虫とらふと飲くとらふ伏蟄し
 て来春ふ至ふ云和俗液雨とらふと訓と時節と取

合せて 兼三冬物 霜見草

冬菊の異名と 藏王の代へし

松の木うけの霜見草うゑ 霜 今朝の霜 朝霜
霜 霜夜 霜日和 霜解

大戴礼霜ハ陰陽の気あり陰気勝るととを
 凝て霜とある秋名ハ霜ハ衰とつゝ其氣慘

毒ありて物比皆衰ふるあり○青女さひふとを
 霜の

三ツの花ボの異名あり各頭字の部ふ注す
 花 華語 天至中青州盛冬ふと濃霜
 霜の

春秋感精符霜ハ殺伐之表云新撰朗詠霜詩
 云寒鞭馳来難駐曉又裁未錦不完中各 遠途

集落葉衣とらふハ霜の斂くぬ実次ハ霜と斂ふと
 云いハ又斂と霜ふとてものふあり本朝文粹奉行文

去雄斂在腰技 霜柱 新撰六帖 谷うゝ 岩屋ふと
 則秋霜三尺源 霜柱 霜むとらふと冬とて

霜山朋 同上 山里の霞のあざの霜
 らん 光夜 霜むとらふと冬とて

冬 志

？衣笠 **霜とん** 同上 山のおもての

内大臣、 光俊 ひさこ集 夕薄 霜の

○青藍云上小あけくる奇の意との

山九鐘のり霜ふるも自ら鳴注云霜ふるも

全気應も 虚栗 盆山の金霜小聲寒し芭蕉

遠近集つるも此鐘ひく霜夜くる重安 **霜の聲**

宋邦綏相鐘詩響沈初月落声遠帶霜残

匠材集 紹巴 霜の色注寒時ちくし声あらし **霜**

云句兄弟 酒々とき蒲團みきり霜の声其角 **霜**

の鶴 八重垣 霜の雀と霜の雀との **霜た**

み 古式小載む按むる小霜柱小對して **霜の袴**

義未詳作例とあひて後勘と俟の 遠近集

質物の霜ふる袴春遊降霜の袴着る六ッ

の花保友玉海集 日あけ冬く破るや霜のあらし

重治 **霜やけ** 前漢趙充國傳 塚墮の患注

云〇和俗 **志の雪** 木の葉をこつり

霜やけあり ある雪の下にけく

かひるとりてり人のわきま **志また** 御傘

戸まをころるやあづり雪荷凡 **白炭**

とら舟もやこころ **篠吹** ある部書

せまふれり **白炭** 葉の条

雍州府志 河内國光の滝の土人樹の枝を伐 **獣**

寸むくり小枝と連ねると焼其色白灰色これと白炭

と称す **炭** 晋の羊琇性豪侈て費用復齋限あし常ふ

炭 層炭と和し獸炭を作り酒を温む洛下の豪

冬、 志

貴競ひてこれ小倣人國老終死宋の太祖嘗く冬月
獸炭を徹つ左右徹して曰今日苦寒上の曰天下の民
寒き者衆し朕何 助炭 冬春地炉を覆ふ
と獨温諭あらんや

燼 火炒の小さき者 生薑酒 本朝食鑑生薑酒
凍腹及び冷積と
し教品あり

治 十月 襪 くの部 獻履襪と
之を条小注を 生薑堀

滑稽目雜談 本草木の説よらハ秋月根と堀べ
きふや京都ふハ多く冬月小ほるもの多近來は季物
小十月とも猶東國 新干蕪 新干大根
ハ秋分前後堀之
九干蕪ハ冬至以前小根と取て燂間小掛てこれと
乾りものを名ふ干蕪と名づく春月煮食ふ極て甘美

十二月 志はま 能諸歲時記 この月とのひ
てをいひてを志はまといふ

年極の略くつとを連声ありていふハいつを打まか
せとらる後師まよつて種々の説をある者ハとを

暗推あり、奥儀抄小云この月僧とびり佛名を行ハ或ハ
經ともませ東西小航走とらる故ハ師走せ月とあやま
れりと其字ふつきて説設らるの誤ハ貝原篤信云豊
後国小四極山あり四波津山と称をその名も訓也證せ
まてハこの説其要を得る小似たりと云れども四教の
四ふありてとらるのとを畧せるもハ四波津と書ハ可
真名ふハ年極 神今食 十日 六月十二月一年ハ兩度
とらる魚ハ

正月事始 言 紀事十三日正月万々の事始
めて修之俗ふこれと正月の事始

勝の餅 この部九条天神 祭の条小出ツ 鹽引

鮭、塩鯉 このころハ歲暮 齒朶川 虚栗へ
の心あふ冬あり

齒朶川 命うぬ落川といひ 除歲、除夜
て冬季の部小出せり作例ハ

沈活筆談以新易舊日除 名 此の部ふ
如新舊歲之交謂之歲除 任せ出せ

冬 志 び

十月 水魚と賜 公事根元 更衣の節会 於

の花 五出細き白花をひらく 天和本草 狗骨本草 時珍説ひらき小あつた木皮と煎じ鳥もち

枇杷の花 夏のひの部 枇杷 和漢三才 有之 実の条小注

鶉 雀の如し頭黒く白き尾あり俗霜降とく領頰正黒 背翮反赤やう黒き尾あり翅の上白き羽黒き羽あり 又黄鶉あり貞亨式 古抄小渡鳥の部ふ入るを其

名もとの声も朝霜の気色といひ秋や小鳥の多 又黄鶉あり貞亨式 古抄小渡鳥の部ふ入るを其

三冬物 水魚 此水魚といふ所の江湖の 名産あて他州ふあり伊勢江戸の江

宇治川は網代と打てると取堅田あて 撞網と以て 小あり白魚より勝て潔白あるものあり江州田上及び

多く 水魚の使 延喜式 山城国近江國水魚網 取り 代一處其水魚九月より十二月

水面鏡 藻塩草紐鏡と 書水のうゝもの

火鉢 火桶 桐火桶 枕草紙 人の家お

干葉釣 や菜とあつた 部の部とるべし

十一月 ひの部とるべし

日吉祭 中の申の日の一年ふ兩度あり夏の 部の部とるべし

野祭 のまつり 上申日一年ふ兩度あり 夏の部とるべし

祭 中辛 公事根元 建曆三年十一月十八日より始

暦寺の衆徒長樂寺やう官兵の為ふ多く誅せ らふ加やうの事とてそのころの御願ありとて

冬 ひも

日蔭の糸、日蔭の甘曼この部豊明の日の

使この部御祭十二月 於賣此の部市分の兼

も十月 子夏旬公事根元 大うこの義の兼

紅葉散貞宣式 小古式とわごとく秋と兼

三冬物もち雪青藍云もち雪との詞増

抄のまらちと假字とをて書て故ふ名義明らふらざる

小より月令博物筌ふ雪の石又ハ木をてつりつり

とててたもあり雪とものつり心ふとしあどつる推量

の説もなりもち雪とらハ粉雪小米雪とてい

同く餅ふとていふあり寛文四年印 餅雪

便船集寛文九年印 本梅盛撰小米雪粉雪餅雪男文字とて

書くる毛吹草 餅雪のうきことある木の

葉丸道二天子集 餅雪ふ齒とことつける木履の那

重頼 餅雪のうら空 十四日一年 小雨

度あり夏のゆ 十月 杜本祭 寒竹の子大

の部とていふ 十二月 孟宗竹 和

本草 品寒竹冬筍と生む又孟宗竹ともいふ色黒く

細し、○晋の孟宗至孝あり後母筍と好む宗とて

冬、月とれと求めむ宗竹林ふ入て慟哭筍を為ふ

生む、以て母供まると得るとつる古事ふありて

孟宗竹とていふとて、○鳳尾竹 餅春 餅米洗 紀事

と孟宗竹ともいふとつる、餅春 餅米洗 餅の

尾備夫益夜とて木槌と肩り、街衢に巡り、高き

餅搗とて呼ば俗米餅と春と加都とら貧民これ

と雀ひ以て餅と春む日間ハ暇なきもの又

乞人の餅と請者と嫌ひ多く夜ふ入て春、餅の札

吾山遺稿 江戸ふて非人とも門々ふ立て餅春の祝いと

餅とていふひ得る家とていふ家との印小門の柱ふ

紙とて判とて張やくあり、云 猿蓑 餅花 紀事

弱法師我門の、餅の札 其角

冬

も

兒女小丸の餅と枯枝小貼て
これと翫ぶことと餅花のよ

世 十月 折言文枝

廿日 神社便覧 官者殿 京極四条小鎮座 世舉 此の
神ハ折言文 記請 赦免の社と入 紀事 俗傳ハ此神ハ偽
盟の罰ニ免せむと入故ハ商賣此社ハ請て敷き
賣の罰と被ふり故ハ十月廿日 講 恭請と云 折言文枝
と入此社何神あるや詳ふ 世土佐坊正俊と云 此後
義經の前ハ偽り追討使とらるる正と云 因て罰
果ハ殺され故ハ他人の 青女 高秀曰 青女ハ青天
偽誓の罰と救ふと云

兼三冬物 列卒繩

この部鷹 西施乳 豚

十二月 節分

の異名こふ 豆打 終さき ちまひの
の部こふし 頭さき 鰯さき 鬼外
福ハ内 紀事 元節分ハ立春の前日ハあり 年内節分
年越 ありと云ハ 禁裡 煮豆と殿中ハ撒せしむと云
疫鬼と云ハ 春ハありハ 亦然リ 今夜大豆と撒と拍と
いハ 同夜家々の門戸ハ鰯の頭首ハ 狗骨の條と挿

ひ傳へいこの二物 疫鬼の思多 所あり 一家の内ハ
事と執る者と年男と云ハ 高声ハ 鬼ハ 外福ハ内と呼
て 疔と穰ハ 福とりと云ハ 下界ハ ありの頭さきと云
廿日記 九重の門ハ 注連繩と云ハ 頭のひくさきと云
あんどいふと云ハ 日本書紀 云ハ 口女即鰯
魚云ハ 卜部の説ハ 籾ありと云ハ 道遠軒ハ 名吉伊
執鯉と云ハ 魚云ハ 〇いさきと云ハ 埃囊抄 聞鼻と
云鬼ありと人ハ 食ハ 鰯と云ハ 申と云ハ つけて 家々の門
小さきと云ハ 然ると云ハ 鬼人とも云ハ 昆沙門の
御示現云ハ 夫木 世の中ハ ありと云ハ ねと云ハ けらぎの
色ハ 出てもいさきと云ハ ねと云ハ 為家ハ 〇むと云ハ 節
よの頭さきと云ハ 後ハ 鰯と云ハ 物ありと云ハ 節

季候

紀事 節季候 今日 二より 乞人 笠の上ハ
菫菜の葉と挿し 赤き布と以て 面を覆
ひふぐりハ 両眼と出し 二人或ハ 四人 相とわハ 人家ハ 入
り庭上ハ 躍と催し 米銭と云ハ 思と云ハ 節季候と云ハ
節季と告る 歳暮の詞あり 二十七ハ 日ハ 至て 止むハ 〇
今江戸にて 節季と云ハ 者ハ 空ハ 編笠と以て 面を覆

冬 世

ひ室尽しふど重ききり紙の前垂とけ破り竹
と両手小持てこきこき囃しふら祝詞と唱く

門口せらぎ節季せらぎ倭俗臘月とせらぎ節料米せらぎ時記十

二月上旬或は中旬臘月の節よ入て多く米と春野へ
て以て正月の用とこきこき〇曠野集附米春やこい志

く其角 歳暮祝ふ凡七記吳蜀の風俗附歳晚相与小鯢ふこれを

鯢歳と云云かの國 **す**十月水官解厄十

この國をわらわむるに 潜確類書千葉と真の水仙

けの部下元 水仙花とをこきこき單葉の者と

の糸ふ出 兼三冬物 杉焼杉の

と云云云單葉の者 香ととめめわ炭うしら

と金盞銀臺と名く 炭斗茶經烏府是炭斗

と云云云移さんかかめ杉板の上 小野炭白炭

あて焼あり相まて焼もありと 炭 輪炭廻り炭

炭炭賣炭翁各頭 炭斗茶經烏府是炭斗

字の部ふらうもて注ス 炭斗茶經烏府是炭斗

異やあり好む 炭頭玉海集類室 ちうりしハ

と云云云 炭頭玉海集類室 ちうりしハ

宗より青藍云伊豫の産某云我國あてハ炭ののまど

炭と焼く竈とり御今山類あり 炭焼 御今

炭炭竈ふ手負の猪の倒れり凡兆 炭焼 山類

わらと 炭賣冬の日炭賣のおのか すがると

人倫 炭賣妻とと黒うらの重丸 すがると

かの部棹のまめめがうつこハ 十二月煤拂長明

冬 物詰此事陽成院の御時ふ始る〇或説ふ煤掃ふ十

三日と用ふると此日思宿ふあり吉日ふれ煤と拂ふ

增補歲時記瑯草冬之部終

